

第3回 新潟市芸術創造村・国際青少年センター指定管理者申請者評価会議 議事録

会議名：新潟市芸術創造村・国際青少年センター指定管理者申請者評価会議

日時：平成30年1月23日（火） 午後1時から午後5時45分まで

会場：市役所本館6階 第3委員会室

委員：太下委員、豊島委員、長澤委員、橋本委員、綿江委員、渡邊委員 計6名

傍聴者：5名

事務局：文化スポーツ部文化政策課、教育委員会地域教育推進課（代表）

発言者	発言内容
太下会長	<p>それでは時間になりましたので、プレゼンテーション及びヒアリングの開始となります。</p> <p>事務局は傍聴者と申請者を入室させてください。</p>
太下会長	<p>それでは、これから、申請者のプレゼンテーションを行っていただきます。時間は、60分以内です。55分経過時と60分経過時に、事務局がベルを鳴らしてお知らせしますので、時間厳守でお願いします。</p> <p>なお、申請者へは、提出済みの書類に基づき、プレゼンテーションを実施していただくこと、それから、事業計画書および公開プレゼンテーション資料に第三者の個人名または個人が特定される記載がある場合は、相手方に確認を得ているか、公開プレゼンテーションで説明していただくよう通知しているということです。その点を含め、プレゼンテーションを実施してください。準備ができましたら始めてください。</p>
申請者	<p>当社は、同施設事業における経営理念として、「自然・創造・共生による町づくりに市民が活発に触れ合う地域世代間交流拠点を目指します」を掲げました。同施設の周囲には、動植物が豊富な松林があり、目の前には、夕日と砂浜の美しい日本海が広がっております。そして、来場するごとに、四季の移ろい、自然の優しさ・厳しさを感じることができる絶好のロケーションです。その自然環境の中で、子どもたちが普段触れ合う機会が少ない芸術家や創作作品に触れる。市民の方々が創作活動にいそしむ。そして、そこに交流や支援の和が生まれる。私たちは、さまざまな体験を通して、子どもたちが、自然・地域・外国の方々などと積極的に触れ合うことで、共生力を身に付けた心豊かな子どもに育ててほしい。</p> <p>また、一部の愛好家や教育関係者だけでなく、同施設を地域の方々が気軽に立ち寄れる憩いの場、地域コミュニティ活動の拠点にしたいとの思いから、今回、公募に参加させていただきました。</p> <p>そして、その経営理念を具現化するための経営方針として、以下の3項目を掲げました。経営方針1、水と土の芸術祭の理念を継承した文化・芸術活動支援事業を展開。経営方針2、プロジェクトアドベンチャーと同種体験活動プログラム、二葉アドベンチャーの設置。経営方針3、地域の方々が3世代一緒に利用できる施設、これらの方針に従い、事業運営を行ってまいります。</p> <p>続きまして、具体的な目標設定についてですが、最初に、資料で事業区分が逆に</p>

なっていること、そして、大畑少年センターが、西大畑少年センターと表記されていることを訂正させていただきます。申し訳ございませんでした。

新潟市の公の施設管理型評価書では、平成 30 年度の利用人数目標は、年間 58,000 人以上となっております。ですが、当社は、利用人数目標を、64,530 人としました。その根拠ですが、新潟市の 58,000 人という目標が、平成 26 年度の大畑少年センターでの実績、約 52,000 人と、旧二葉中学での水と土の芸術祭 2015 サテライト会場実績、約 5,800 人が基になっていると推測し、芸術系事業では、もっと利用人数を増やすことができると考えたからです。

そして、この目標設定でもわかるように、当社は、体験系事業を基本事業と位置付けております。大畑少年センターの事業にさらなる付加価値を創造し、その上で、統括ディレクターを中心に、水と土の芸術祭から派生した芸術系事業を、市民と共同で体験活動との融合に挑戦いたします。

次に、そのための職員配置についての特色です。館長には、管理職経験のある教員資格を有した人材を配置します。そして、事務の効率化、所管課対応として、指定管理者業務に精通した事務局長を配置します。施設維持管理の責任者として、施設管理長を配置し、非常勤のプロパティーマネジャーと共にエネルギー削減計画にも取り組みます。

アシスタントディレクターおよび運営スタッフについては、大畑少年センターのスタッフを継続雇用するほか、インストラクター経験者を 3 名、芸術関連施設の経験者を 1 名、学芸員 1 名を配置します。さらに、国際交流スタッフとして、英語能力のある交流事業経験者および外国人を雇用します。なお、国際交流スタッフには、自主事業として初めての英会話教室の講師も担当させていただきます。

その上で、事業運営については、経験豊富なディレクター陣を責任者として配置します。小川弘幸氏が、統括兼芸術系ディレクターとして常駐します。そして、鳥羽和明氏が体験系ディレクターとして、月 10 日から 15 日程度勤務し、加えて、アシスタントディレクター以下、インストラクター経験者が複数名常駐します。

では、これより、両ディレクターより、各事業の説明をさせていただきます。

それでは、私のほうから、文化芸術活動支援事業への取り組みについてご説明いたします。まず、ディレクターを務めます私の自己紹介から申し上げます。私は、新潟市の出身で、民間運営の美術館、倉庫美術館の開設スタッフなどを経て、1992 年に独立いたしました。NPO 団体文化現場を立ち上げ、四半世紀にわたって新潟の独自性を生かしたさまざまなジャンルの文化芸術活動を企画・制作してまいりました。

また、これは県の事業ですが、阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業では、プロデューサーとして、流域の地域資源を活用しながら、新潟水俣病の患者さんと地域住民らとのもやい直しに取り組むコミュニティー活動にも取り組んでまいりました。

ここでは、私がこれまで取り組んできた主な国際文化交流事業について挙げております。美術活動に関連いたしましては、水と土の芸術祭、今回の今年の開催を含めると、計 4 回になりますが、全ての年度において、主要な立場で関わってまい

りました。

芸術祭は、トリエンナーレ形式で行っており、つまり、3年に1度の開催ですが、規模が大きい事業ですので、準備にも時間を要します。2008年の準備から数えますと、今年で丸10年、水と土の芸術祭の総事業に携わってきたとすることができます。

次に、経営方針についてです。私たちは、水と土の芸術祭の理念を継承した事業展開を行います。そもそも水と土の芸術祭は、単なるアートイベントではなく、平成の大合併を経て誕生した新しい新潟市が、政令市として都市のアイデンティティを模索していた際に、本市の成り立ちがまさに水と土によるもの、具体的には、信濃川と阿賀野川が運ぶ土砂が河口に堆積してできた平野であり、土地改良や自然との共生の仕方など、私たちの暮らしや文化、産業も、その賜物であると見出したことに始まるものです。

私たちは、どこから来て、どこへ行くのか。新潟の水と土から、過去と今を見詰め、未来を考えるとという芸術祭の基本理念は、水と土の文化創造都市の推進という本市の文化政策をそのまま裏付けるものであります。これを具現化する施設として、新潟市芸術創造村はあるべきです。新潟市の特徴的な地形である日本海を望む砂丘列に立地していることも特徴的と言えます。

次に、アーティスト・イン・レジデンス事業についてご説明いたします。中堅および新進の芸術家が、一定期間滞在しながら創作活動を行うアーティスト・イン・レジデンスは、芸術創造村の核となる事業と言えます。ここでも私たちは、水と土の芸術祭との連携を全面に打ち出した事業展開を図っていきます。芸術祭の成果やネットワークを引き継ぐことで、新規事業における信頼度と認知度を高め、全国的な発信力を持った取り組みに育ててまいります。

また、今年実施する水と土の芸術祭において、これまで好評だった公募枠がなくなったことから、アーティスト・イン・レジデンスは、芸術家にとって、芸術祭の登竜門的な意味付けも期待できるものとしたします。そのため、芸術家を選出する審査には、水と土の芸術祭のアートディレクター等を委員として含めることを提案いたします。

次に、アーティスト・イン・レジデンス事業の募集方法についてご説明いたします。2カ国語以上のホームページ、および、SNSを効果的に用いるほか、美術誌など、有効な広報媒体を活用していきます。新聞各紙、テレビ各局、FM-NIIGATAやFM PORTなどの各種地元メディアはもちろんのこと、全国も視野に入れたパブリシティー展開を積極的に図っていきます。

また、国内外のアーティスト・イン・レジデンスを実施している施設との連携も図っていきます。具体的には、東京の3331 アーツ千代田や横浜のヴァンガード、さらには、ニューヨークのMoMA PS1などが挙げられます。アーツ千代田やMoMA PS1は、共に元公立の中学校や小学校だったところを改修した文化施設であることも共通しています。

また、近年各地で盛んに行われるようになったアートプロジェクトとの連携も重点的に行っていきます。地元の具体例といたしましては、NIIGATA オフィス・ア

ート・ストリートや小須戸 ART プロジェクトなどが挙げられます。また、海外の芸術家とつなぐため、東アジア諸国や姉妹・友好都市との連携も図っていきます。文化庁が指定する東アジア文化都市に選ばれた本市ですが、その中核事業として、前回の水と土の芸術祭を実施した縁も生かしていきます。

次に、招へいプログラム等選定委員会の設置運営についてです。先の説明でも触れましたが、水と土の芸術祭との連携を打ち出すために、選定委員には、芸術祭の現役ディレクターおよびディレクター経験者を含めることを提案いたします。さらには、本施設が、地域芸術振興および教育施設でもある認識から、各界でご活躍され、広く認知されている方々を候補者として記載させていただきました。

ただし、ここでお断りしておきますが、委員の選定は市との協議事項でありますから、事前の接触はいたしておりません。ここでは、具体的な提案としてお名前を挙げさせていただきました。

次に、アーティスト・イン・レジデンスに関するその他の取り組みについてご説明いたします。なにぶん新規事業ということもあり、応募者の不振に備える対策として、国内外の幅広い芸術家のネットワークを活用した呼び掛けを実施することができます。私自身、この1、2年のうちに台湾へ四度招かれ、アートプロジェクトを通じた交流を続けております。顔の見える関係をベースとしたネットワークこそ、最良の呼び掛け手段だと確信しています。

また、アーティスト・イン・レジデンスで滞在する芸術家のために、メセナ活動やクラウドファンディングなどを通じた経済的な支援を行います。よりよい環境で創作活動に専念できるようアーティスト視点に立ったこまやかなサポートを実施していきます。

次に、市民との共同、市民交流活動についてです。ここでも、水と土の芸術祭との連携を生かした展開を図っていきます。というのも、水と土の芸術祭最大の特徴は、市民が主体的に関わることで成立している芸術祭であるということからです。水と土の芸術祭のアートプロジェクトにおいて、作家の制作活動をサポートするなどをしてきた市民サポーターの皆さんが、アーティスト・イン・レジデンスで滞在する芸術家のサポートに回ることは、ごく自然な流れとしてあります。

また、市民プロジェクトとして、新潟市民が自主的に企画・実施してきた事業の多様性と地域性こそが、新潟の独自性であり、市民の文化力の表れとすることができます。芸術創造村は、市民サポーターや市民プロジェクトの交流拠点施設として大いに活用されることが期待されます。

次に、市民交流事業についてです。アーティスト・イン・レジデンスで滞在する芸術家と市民との交流を図るための事業を積極的に行います。内容については、芸術家の特性を發揮できるものを、協議の上、実施いたします。制作過程の公開やアーティストトーク、レクチャー、ワークショップ、コラボレーション企画などが考えられます。

市民交流事業では、各地の地域文化、芸術団体との連携による交流事業も継続的に行います。水と土の芸術祭における市民プロジェクトの実施団体をはじめ、西大畑旭町文化施設協議会「異人池の会」への加入および連携、これらの活動を通じ、

市民文化の成熟、地域のにぎわい空間の創造、ボランティアの運営能力のスキルアップ、地域リーダーの人材育成にも努めてまいります。

次に、地域文化芸術各団体による市民交流の活動事例について幾つかご紹介いたします。まず右側の写真ですが、これは、新潟市芸術創造村・国際青少年センターになる前の旧二葉中学校の外観です。緑の植物が目立ちますが、これは、二つのアートプロジェクトをやったときのものです。

この年、2015年ですが、水と土の芸術祭のベースキャンプ会場として旧二葉中学校が舞台となりました。アート作品の展示のほか、カフェやショップ、それに事務室もあり、準備期間も含めると、およそ1年半、私は総合ディレクターとしてここに通いました。そして、すっかりこの施設および周辺地域の魅力にほれ込みました。その後、この地区に住まいを移したくらいですから。

写真に話を戻しますと、この緑は、手前のほうがアーティスト日比野克彦さんによる「明後日朝顔」というプロジェクトで、後ろのほうが、建築家ユニットによる作品です。つる性の植物を育てながら緑の回廊をつくり、夏の日差しからの木陰空間をつくり出したものです。これらのプロジェクトは、毎日の水やりなどを通じ、多くの地域住民との協力で展開したのものとして人気を集めました。その後、収穫した作物は、ヘチマやヒョウタンなどですが、ワークショップの素材となり、さらなる創造の機会をもたらしました。

また、左側の写真は、体育館で展示した二つの市民プロジェクト、鳥凧と鯛車のコラボレーションの様子です。鳥凧も鯛車も、貴重な新潟市の民芸クラフトですが、作り手や文化の継承が課題となっているものでもあります。共に水と土の芸術祭を通じてスポットが当たり、近年再評価が高まってきています。

左側の写真は、新潟市内の高校ダンス部が合同でユニットを組み、創作ダンスを行った市民プロジェクトの様子です。新潟市内の高校ダンス部は、全国屈指のハイレベルとして知られています。このときは、当初、手作りキャンドルとのコラボレーションで西蒲区の上堰湯公園での野外公演を企画したのですが、あいにくの悪天候で、ろうそくに火がともせなかったことから、後日、リベンジ公演を体育館で行い、写真は、そのときの様子です。

右側の写真は、南区臼井の地区100年の空き店舗を会場に、アーティストが滞在し、作品制作を住民と共に行った市民プロジェクトの様子です。まさに、アーティスト・イン・レジデンスを市民プロジェクトでも先駆けて実施した例の一つです。ここでは、その後も、アーティストと地域住民が交流を続け、現在では、たぬきの茶釜として、地域のコミュニティースペースとして機能、活用されています。何でたぬきなのかと申しますと、この町がたぬきの婿入り行列で知られていることから、たぬきが町づくりやアートのキーワードになっているということでもあります。

左側の写真は、水と土の芸術祭における子どもプロジェクトの一コマです。子どもプロジェクトは、市民プロジェクトと共に、継続的に実施している芸術祭の主要プロジェクトの一つで、主に小学生、中学生を対象とした事業です。芸術創造村では、体験系プログラムとして、発展的につなげていくことができます。

右側の写真は、前回の芸術祭の際に、旧二葉中学校の校内で実施した一箱古本市

の様子です。業者ではなく、市民が不要な古本を持ち寄って行うマーケットですが、コミュニティイベントとしても魅力的な取り組みで、大勢の参加者でにぎわいました。

次に、その他、文化芸術活動支援事業についてご説明いたします。まず、水と土の文化ギャラリーの企画展示および運営についてです。本市の水と土の文化を紹介する企画展示を、年2回以上実施いたします。全国の芸術祭関連資料や、美術・芸術関連書籍等を設置するとともに、管理運営をいたします。ここでは、本市の文化政策に精通したスタッフや市民サポーターらの協力により、図書館司書のような対応ができるコーナーといたします。

併せて、アーツカウンシル新潟と太く連携することにより、生きた文化情報の双方向的な受発信を図ります。2020年の東京オリンピック、パラリンピックにおける文化プログラムが、本市でも多彩に計画されています。そうしたムーブメントの中で、新潟市芸術創造村が果たす役割は少なくないと考えます。

次に、施設の愛称とロゴマークを公募いたします。愛称については、既に募集を終えているようですが、センターの特色やイメージをわかりやすく表現したシンボルマークなども、若手クリエイターを起用するなどして、新たに採用することを提案いたします。

次に、全国芸術祭サポーターズミーティングを開催いたします。これは、前回の水と土の芸術祭が行われた2015年に、新潟の市民サポーターの呼び掛けで始まったもので、各地の芸術祭にサポーターとして参加する人たちが一堂に顔を合わせ、情報交換や課題解決に向けた話し合いをする全国会議です。その後、名古屋、横浜にバトンが引き継がれ、今年、再び新潟市での開催が決まっています。芸術創造村がその会場となることで、全国的な発信力を高め、新たなネットワークを育むことにつなげていきます。

最後に、二葉アートスクールを開講いたします。施設の学びやとしての性格を生かし、文化芸術および青少年の社会活動全般にわたるクリエイティブな現場で活躍する多彩な講師を招いた講座を定期的で開催いたします。地域間交流や人材育成も併せて図っていきます。

学校に行きたくても、経済や家庭環境などのさまざまな理由から、希望する学びの機会を失ったままの人もおられることでしょう。年齢や経歴も国籍も関係なく、誰もが等しく学びや体験にチャレンジできる機会、そんな場を一つでも多くつくっていきたいと思っています。私のほうからは以上です。

では、続きまして、私、鳥羽和明のほうから、青少年体験活動推進事業についての説明をさせていただきます。よろしくお願ひします。

まず、簡単に私の自己紹介をさせていただきます。1974年、三条市出身で、現在もなお三条市に在住をしております。平成23年度から、三条市グリーンスポーツセンターという施設で勤務をしまして、この7年間、ずっとセンター長を務めています。そちらの施設は、三条市が持っているスポーツ合宿とかができる宿泊施設になっているのですが、通常の管理業務のほか、この後、紹介させていただく、各種自主事業の企画・運営などをしております。

プロフィールの中にも書かせていただいておりますが、平成 26 年に国立妙高青少年自然の家が実施しました妙高アドベンチャーの指導者の養成講習会に参加をさせていただいて、後ほど紹介させていただくアドベンチャープログラムの指導者資格を得て、その後、さまざまな場でアドベンチャープログラムの指導に入らせていただいております。

あと、ネーチャーゲームインストラクターであるとか、NEALインストラクター、レクリエーションインストラクター等の資格も数多く私は所持していて、県内外のさまざまなそういった指導者の集まりの協会ともつながりがあるというふうな方たちです。

この三条市グリーンスポーツセンターでは、三条自然学校という名称で、さまざまな体験活動イベントを実施してきています。スライドに表示されているのは、平成 27 年度の実績で、一部を抜粋したものです。この年は、年間合計で 43 回の実施ですが、実は、平成 28 年度の数字が出ていまして、平成 28 年度は、延べ、年間で 80 回の事業数になっています。合計の参加者も、27 年度は、スライドの通り 814 人ですが、28 年度は、1,044 人を数えています。

そもそも、平成 22 年度まで、三条市が直営でやっていたときは、春と秋のハイキングイベントを 2 回だけの実施でした。それを、今、民間の指定管理者として入ってから、イベントをどんどん増やし、今では自主事業の参加だけで 1,000 人の方が施設を訪れるような状態になってきています。

こういったことから、当施設でも、私が三条で展開をしてきたプログラムを、いかたちでアレンジをして提供していくことがすぐにできるということです。

それでは、少しずつ、同施設の中での経営方針ということで、青少年体験活動推進事業の中身についてお話をさせていただきます。今回、募集要項と仕様書を読ませていただいた中で、芸術系と体験系があり、体験系事業の中では、これから一番に説明をさせていただく人間関係づくりプログラムが最重要だということで書かれていましたし、私もそのように認識をしているところです。

人間関係づくりプログラムについては、施設を利用される団体向けもそうですが、個人を対象としたイベントでも活用をしていくものです。日本国内の人間関係づくりプログラムで主流というと、株式会社プロジェクトアドベンチャージャパンが、広く国内で普及活動をしているプロジェクトアドベンチャーという手法を使った活動があります。主にチームビルディングだとか、人間関係づくり、そういったことを目的に実施されているプログラムですが、その手法を用いて、当施設でも人間関係づくりプログラムとして提供していきたいと考えています。

その名も、旧二葉中学校なので、二葉アドベンチャー、略称をFAとして実施していきたいと思っています。

平成 26 年に、私は妙高の施設に妙高アドベンチャーという名称のプロジェクトアドベンチャーの手法を使ったプログラムの指導者資格を取りに行ったときに、どれぐらいの率で学校がそのプログラムを利用されているか伺ったのですが、非常に好評で、県内の各学校だけでなく、時には県外からも、たくさんの児童・生徒が集まってきているということでした。

これまでですと、新潟県内では、妙高に行かないと、そのプログラムを受講することが、できなかったのですが、それが、今回、新潟市に新しくできる当施設で体験することができるようになるというのは、新潟市内の学校の児童のみならず、新潟市外の方たちにとっても非常に大きなメリットがあるのではないかと考えています。

今の社会、自分自身に挑戦できる場であったり、仲間と協力してアイデアを出し合って一つの課題をクリアしていく場や、子どもたちにとっての成功体験、達成感を味わえる場というものが、どんどん少なくなっている現状があります。二葉アドベンチャーを体験していただくことで、からだ全体をダイナミックに使いながら、基本的には野外に置いてある木製の道具、エレメンツと言うのですが、木製の道具を使って仲間とコミュニケーションを取りながらクリアしていく、そういったことで、チームづくり、クラスのムードアップにはとても最適なプログラムではないかと思っています。

少し、より具体的なお話をさせていただきますが、仕様書の中でも、プログラム例ということで写真と幾つか例が挙がっていました。そういったものも踏まえ 10 以上のプログラムが提供できるように整備をしていきたいと考えています。10 以上のプログラムの選択肢を用意した上で、利用団体が、自分たちはこれを使いたいということを相談して決定し、二つ、三つ、四つのアクティビティーを実施するというようなイメージになるかと思えます。

実際に設置するエレメントについては、新潟市と指定管理に入ることが決まった後、協議をさせていただいてから決定したいと思っています。基本的には、野外での設置が好ましいと考えています。プロジェクトアドベンチャーの手法は、そもそも、基本は野外です。とはいえ雨が降ったら外で活動はできないということがあっては困るので、体育館の中のできるような道具を設置することも必要と思っています。

体験していただくためには、体験の指導者が非常に重要なのですが、プログラム指導者については、事前に研修を受けた、私を含めた同施設に入る職員で対応する予定です。

事前研修を受けるということは、プロジェクトアドベンチャーの手法の指導ができる資格を得ている者に限る予定です。たまに 100 人を超えとか、200 人を超えとか、そういった利用があるときだけは、外部の指導者を手配することもあるかもしれませんが、その場合も、指導経験者に限って手配をさせていただく予定です。

3月に兵庫県で4泊5日の研修会が開催されます。これは、プロジェクトアドベンチャージャパンが公式に行っている研修会ですが、そこにも、私を含め、施設に入る予定の6人のメンバーが、今、参加を申し込んでいるところです。

三つ目のファシリテーション講座を開催とは、プロジェクトアドベンチャージャパンが主催している研修等に参加をすると、取りあえずは、その道具を使って人間関係づくりプログラムを体験してもらうための指導はできるようになるのですが、限られた時間の中で最大限の効果を引き出すためには、マニュアルにのっとりした手

法だけではやや足りない部分があります。そういったところを補うために、ファシリテーション力というものが必要になってくると考えており、年に2回、ファシリテーション講座を開催し、それを補っていきたいと考えています。

県内では、妙高アドベンチャーのほか新潟市秋葉区のほうで、NPO法人アキハロハスが、「Akiha 森のしょうがっこう」という授業を実施しているのですが、その2カ所がプロジェクトアドベンチャーの手法を使ったプログラム提供をしていますので、定期的に情報交換をしながら進めていきたいと考えています。

このようなかたちで、これまで培ってきたさまざまなネットワークを、この二葉アドベンチャーの中でも活用させていただいて、新潟市の中でも特徴ある事業として育てていきたいと考えています。

次のスライドが、指導者育成講座です。この中には、二葉アドベンチャー以外の指導者の養成講座を含んでいる面もあるので、後ほど説明したいと思います。

次に、松林や砂浜を利用した自然体験活動ということで、幾つか紹介させていただきます。これは、青少年個人向けということで募集要項にも入っていたのですが、青少年個人向けだけでなく、利用団体向けにも同様に実施をしていけるように、整備を図っているところです。

三条自然学校で行っているさまざまなプログラムを、さらに同施設に合うかたちで、オリジナルに内容を変えて実施をしていきたいと思っています。

幾つか具体的に紹介させていただきますが、ネイチャーゲームは、自然の中で、自然に触れ合いながら、自然の美しさ、面白さを知っていただく活動です。私は、古くからネイチャーゲームの指導者であって、たまたま、今、新潟県の指導者の集まりである新潟県シェアリングネイチャー協会の事務局長をしています。指導者の人数が足りないということであれば、新潟県内の指導者の追加の派遣も可能ですし、妙高とか三条で、年に1回、ネイチャーゲーム指導者の養成講座を開催しているのですが、当施設ができてからは、この施設で指導者の養成講座も開催していけたらよりよいと、会の中で話をしているところでございます。

プロジェクトウエットは、水をテーマにしたパッケージプログラムのアクティビティです。これについても、私は指導資格を持っていて、同施設は海が近いということもあり、昨今、水害、豪雨による災害も多くなってきている中で、このプロジェクトウエットの中には、そういう水害に対応するようなことを学べるプログラムも多数ございますので、防災的な面も含め実施が可能かと思っています。

アウトドアチャレンジ野外力検定というプログラムは全国共通でつくられているプログラムですが、これも、私は資格を持っていて、検定会の主催および検定員をやれる資格を持っています。

木と木をこすり合っ原始的な火おこしであるとか、アウトドアで使えるロープワークのほか、子どもたちがのこぎりを持って径10センチ、15センチぐらいの細めの丸太を切る、そういったものを、楽しみながら野外技術を習得してもらうことのできるプログラムです。その火おこしとか、ロープワークとか丸太切り、一つ一つをクリアした子どもたちには、カードタイプの認定書を、クリアしておめでとうということで、差し上げることができるので、次は違うプログラムの認定書を

もらいたいというリピーターの家族、子どもたちを増やすことにも有効的と思っています。

今時点で、新潟県内で、この野外力検定を定期的で開催している場所はないのですが、当施設では、年6回、開催させていただきたいと考えています。

次も、同じ見出しの自然体験活動の事業ですが、こちらは、団体向けではなく、青少年の個人を対象に実施をするものです。いつの時期に何回ぐらい実施するかについては、事業計画書に、表で一覧を出させていただいていますので、そちらをご参照いただければと思います。

大きく分けると、宿泊事業と日帰り事業がございます。宿泊事業は2種類あって、アドベンチャーキャンプと、わくわく体験キャンプです。キャンプという名称ですが館内の研修施設に宿泊をして、1泊2日、さまざまなアクティビティを体験してもらう事業です。

周辺環境と施設、ハード面をフル活用した上で、2日間、さまざまな体験をしてほしいなと考えています。特に二つ目のわくわく体験キャンプについては、体験系の活動と芸術系の活動のコラボレーションができるかと思っています。昼間は、例えば、外で二葉アドベンチャーのプログラムをやったり、飯ごう炊さんでカレーライスづくりをしたりしながら、翌日は、何か作品作りだとか、絵を描いてみるなど、そういう芸術系のもも織り交ぜながらの実施が可能だと思います。

日帰り事業は、年18回ということで、事業計画書で提出をさせていただきました。仕様書上では、宿泊イベント4回を含め、延べ12回以上の実施を求められていたのですが、日帰り事業だけで18回を今考えています。

特徴的なのが、後半のほうに書いてあるたき火とか、ナイトウオーク、天体観測、星空観察、この辺は夜のプログラムですけれども、三条のほうでは、平日の夜に開催させていただいて、仕事帰りの社会人の方とか、お子さん連れのご家族の方に、平日の夜に集まっていただいて、とても好評です。こういうイベントをやるとなると、土曜日、日曜日が中心になってしまっていて、いろいろなイベントと重なってしまっていて参加が減ったりすることもあるのですが、平日の夜の時間をうまく使って、来館者を増やし、夜の近隣の自然を味わってもらえるようにしていきたいなと思っています。

先ほど飛ばした養成講座に戻らせていただきます。指導者養成講座について、2種類ございます。仕様書のほうに、A業務と書かれていたもの、これについては、二葉アドベンチャー以外の自然体験活動についての指導者の養成講座ということですので。新規指導者向けには、日帰り6時間の講座を年に2回、継続指導者向けには、日帰り3時間の講座を年に2回、これは、私のほか、適任者を講師に招いた上で実施をさせていただきます。プログラムによっては、私のほうで講師ができるかと思っています。

B業務については、二葉アドベンチャー、人間関係づくりプログラム、二葉アドベンチャーについての指導者の養成講座です。こちらは、新規向けには2泊3日という長時間になりますが、これを、年に2回、それと、継続指導者向けには、日帰り6時間の養成講座を年に2回と考えています。このB業務については、プロジェ

クトアドベンチャージャパンより講師を複数招いて実施をさせていただきます。

A業務、B業務とも、全て一般の成人を広く募集して実施をさせていただくと、私を含め、施設に入っている職員、指導に入る可能性の職員全員がスキルアップを兼ねて参加をさせていただく予定でいます。

ファシリテーション講座を、年に2回開催とご説明しましたが、それを含めると、年間で計10回の指導者育成講座を開催させていただく予定を、計画として出させていただいています。受講者は、基本的に指導者グループに入っていて、できるだけ指導の現場にも立っていただくようお願いをしていきたいと思っています。週に1回、ミーティングを開催しながら、実際に指導に入ったときの事例であるとか、こんないいことがあったよ、逆に、こんな失敗をしたよという事例の共有を図りながら、指導者間でもスキルアップを図っていきながら進めていきたいと考えています。

次に、日帰りで実施する自然体験活動の例ということで、幾つか写真を付けさせていただきました。1枚目の写真は、原始的な火おこしをしている写真です。小学生の子どもでも、頑張れば、火がおこせるものだと思います。その右は、平日の夜にやっているたき火交流会の様子です。なかなか今の時代、生の火を日常生活の中で見るのがなくなりましたので、火を囲んで、火を眺めているだけでも、10人、20人の人が訪れているという状況です。

その次は、グリーンスポーツセンターでやっている、テント泊のキャンプイベントの様子ですが、当施設は、テント泊でのキャンプイベントはできないので、実際にテントを建てることはないと思うのですが、こういったかたちで、緑の中、自然の中で過ごしていただいて、自然の中の心地よさみたいなものを、子ども、大人に味わっていただくことは可能かなと思います。

その写真は、竹をのこぎりで子どもが切っている様子です。押さえているのが大人です。アウトドアチャレンジ野外力検定でも丸太切りがありますし、この写真は、この後、切った竹を使って、竹筒炊飯をする準備をしているときの写真ですが、竹を調達すれば、こういったことも可能かなと思っています。

複合施設の特性を生かした取り組みということで、簡単にですが紹介させていただきます。当施設は、芸術系、そして体験系の両面を併せ持つ特徴的な施設と思っています。スライドの左の青い楕円(だえん)形と、ピンク色の楕円形、その重なる部分を、相乗効果を生む場所だということで、その両面を含めた事業を実施していきながら、うまく活用していきたいと思っています。

例えば、体験系に興味を持って、何かしらの事業やイベントに参加した子どもが、その一方の芸術系、文化系のものに興味を持つようになって、何かに取り組む、絵を描くことにその後取り組んでいくとか、そういった相乗効果も生まれるのではないかと考えています。

続いて、国際交流、そして、新潟市の魅力を向上させる取り組みということで、これまで大畑少年センターが関連していた相互国際交流事業というものが幾つかございます。そういったものについては、全面的に引き継いで、私たちのほうで実施をしていくというふうに考えています。

ただ、その中で、事業コンテンツの整備が必要かと思っているのと、実際、そこで参加する相互交流学生たちには、新潟市の文化的特性を生かした体験をしていただきたいと考えているのと、それと同時に、地元の新潟の子どもたちにも、交流事業の中で、新潟の魅力を再発見していただいて、郷土愛を育むことができる体験をということで、再整備をしていきたいと考えています。

そして、最後に、新潟市の文化的特性を生かし、郷土愛を育むための体験事業ということで、幾つか例を挙げさせていただきました。ご存じのように、新潟は、歴史的・文化的・伝統的にも、さまざまな良い資源があります。そういった伝統芸能を体験していただく事業であるとか、食文化も切って切り離せないと思います。食文化を体験していただく事業であるとか、また、実際に新潟の町を歩いて、町歩きをする中で、新潟の魅力の再発見につながるような事業なども実施していきたいと思います。それと、最後に書いてある、物作りです。さまざまな物作り体験についてもやっていきたいと思います。

こういった体験事業については、事業に関わっていただく地元の方も含めて、一緒に、内容については、整備をして、開催していきたいと思っています。

私の説明はこれで以上ですが二葉アドベンチャーをはじめ、具体的な内容について書かせてもらいました。私が、この7年、8年間、ずっと自然体験活動の指導者としてやってきたものを、たくさん活用させていただいて、今すぐにでもできるものを中心に織り交ぜて計画をさせていただいている部分がございます。当施設に携われることになれば、そういったこれまでの経験を生かして、精いっぱい同施設の発展のために頑張っていきたいと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。私のほうからは以上です。

続いて、地域世代間交流事業についてです。旧二葉中学校は、新潟市内において由緒正しい伝統校でした。その校舎の有効活用については、地元の方および卒業生は、強い関心を持っております。当社は、その思いを継承し、再び地域コミュニティー活動の拠点へと進化させたいと考えております。

まず、無料で利用できるキッズスペースを設置します。そこでは、地元クリエイターの創作による子ども用玩具を配置し、気軽に体験できる環境工作教室や初めての英会話教室などを行い、親子で、毎日来場いただける環境を整えます。そして、オーガニック菜園を設置し、地域の方々に開放し、野菜の収穫体験などにも有効活用いたします。

次に、シニア世代との交流活動ですが、コミュニティー花壇として、地元シニアの方が手入れをしてくれた花壇に、近隣保育園の子どもたちより種まき体験を行っていただきます。また、初めてのお茶体験、郷土料理教室、包丁研ぎ教室など、シニア世代による教室活動等を行います。

続いて、稼働の下がる冬季の利用促進についてですが、居場所づくりの一環として、体育館の一般開放、学習室開放を行います。また、今では一般家庭で見ることが少なくなったこたつを、期間限定でキッズスペースに設置し、冬場独特のコミュニケーションを楽しんでもらいます。そして、厳冬の2月、二葉感謝祭を開催します。作品公募による市民文化祭、市民プロジェクトによる創作発表や企業とコラボ

	<p>したワークショップ、障がい者によるアート活動に加え、冬遊びや昔遊び体験、食文化体験など、全館を挙げて、冬期間の利用促進と、芸術と体験活動の融合に取り組みます。</p> <p>これは、当社のほかの指定管理者施設で行っている感謝祭の様子です。毎年、利用率の下がる2月を中心に行っております。屋内施設はもちろん、一般利用のない屋外施設でも行い、地域の方々よりご来場いただいております。</p> <p>次に、安全・安心への取り組みについてです。まず、安全対策の取り組みですが、当社は、本社に管制センターを有しており、不測の事態に24時間対応が可能です。また、1日4回、チェック表に基づく巡回を実施し、さらに、宿泊がある場合については、夜間巡回を、早朝から深夜にかけて3回実施します。加えて、4種類のマニュアルを整備し、それに合わせた研修、訓練を、年3回に分けて実施します。</p> <p>続いて、災害対策ですが、避難誘導経路を明確にした新潟市芸術創造村・国際青少年センター地震・津波発生時の避難ガイドを作成して、利用者に配布します。さらに、避難所として活用していただけるよう、防災備蓄充実を図ります。また、大規模災害によって中核事業が中断することのないよう、現在、当社は、県外業者とBC協定を結び、万全の体制を整えております。さらに、当社のノウハウを活用して、衛生管理評価を重点的に行ってまいります。</p> <p>最後に、私たち、環境をサポートする株式会社きらめきは、今回の芸術と体験活動の融合という新潟市の意欲的な試みに共感し、長い時間をかけてリサーチを行い、何度も話し合いました。同施設は、全国でもまれに見る芸術と体験系の複合施設です。よって、当社は、事業計画作成に当たり、イメージしやすいよう、できるだけ具体的な提案を心掛け、過去の実績に基づいた、より実現性の高い事業構成にいたしました。</p> <p>同施設が、子どもたちの豊かな心を育む、自然・創造・共生の礎になることを心から願っております。長い時間、ご清聴どうもありがとうございました。</p>
<p>太下会長</p>	<p>ありがとうございました。それでは、次に、委員から申請者へのヒアリングを行いたいと思います。委員の皆さまで質問がありましたらお願いいたします。質問をまとめてお聞きし申請者のほうから順次答えていただくというかたちにしたいと思います。</p>
<p>豊島委員</p>	<p>いろいろお聞きをしている中で、非常に総論的にお伺いをいたしました。私どもは、事業計画書も見させてもらいましたので、その中で若干気になったところをお聞きしたいと思っています。</p> <p>もともと市のほうは、この施設の柱は二つあると思っています。一つは、人との交流と人材育成。二つ目には、施設の有効活用が言えるかと思うのですが、まず、この中で有効活用として、アーティストの活用を非常に考えておられる。</p> <p>まず一つ目に、どういうアーティストを、概念的にお持ちになっていますか。アーティストっていっぱいありますよね、種類のには。そのどういうアーティストが基本的なものとしてお考えですか。</p> <p>それから、アーティストの応募がない場合についてのリストはありました。それは独自のリストを使って云々という記載がございましたので、非常に斬新的なもの</p>

を考えられているように思っていて、敬意を表したいと思いますが、この部分について公表できるのであれば、この場で、その若干の独自に持っているものをご披露いただければと思います。

三つ目で、アーティストの活用については、このセンターの運営上まず応募をするときに、8項目なりのものを提案をして、これでも了解できますかという方を集めていると思います。それが3カ月の期間ですけれども、ただ、アーティストというのは何かというと、僕も変なアーティストの端くれとして、一つの作品を作るときに、3カ月は非常に短いと思っていますし、その中にいろんなものの交流も要り、展覧会あり、説明会あり、技術も教える、非常に難しいと正直思っています。

そういうものを、最初に私がお聞きしたように、どういうアーティストを想定しているかということ考えたときに、説明がありましたように、新進気鋭の方、もしくは、二つありましたよね、中堅の方という話がございましたけれども、そういう方が実際の事業に入ったときに、自分の作品ではなくて、もともとからこのセンターをうまく活用していけるんだという一端を担う認識であれば別ですけれども、本当に自分がつくるとなると、なかなかマッチしないんじゃないかという気が正直しています。その辺のお考えを、ひとつお聞きをしたいと。

それから、施設の有効活用ということで、行政の関与を考えてあるのだろうかと思っています。例えば、今回、水と土の芸術祭の祭典でサテライトが予定をされていますけれども、そういうかたちで、このセンターをうまく使うために、市のほうから、有効活用のための手法なり、もっと協力いただいて活用してはというものがあるのかをお聞きしたい。

というのは、ここに活用の目標として、64,000人という数字を挙げてきました。これ、単純でいきますと、1日175人ですよね。それ、正月も入れてですよ。こういう数の人間の子どもたちなり、大人の人を集めて、毎日できるんだろうかという疑問がまずあります。

なので、そういうものの利用活用を図るために、いろんな媒体を使ってPRするのも必要でしょうし、そういう、結果的にそうなるのでしょけれども、その辺の一端が担えればと思います。

あとは、経費の面で記載の中では、自主事業も入れて、利益が発生したものを、できれば、市のほうに還元をしたい。もしくは、還元を職員にもしていきたいという記載がございました。

ところが、この事業計画の経費収支計画を見ますと、1年目から、30ページ出ていますけれども、実際は、経費が上っているだけで、そのものが戻ってくるという感覚が見えません。何年後の計画でそのものが達成をする見込みなのかというのをお聞きできればと思います。

それから、私はいつも思うのですけれども、こういう新たな事業に進出をするとき、一般的には、企業というのは、必ず撤退を考えています。言葉の言い方は悪いんですけども、例えば、この事業が非常にうまく回って、うまく収入が上がってきて、うまく経理が終わったときに、市は手を離すと思うんですよ。僕の言い方は、逆に言うと、市の撤退が考えられるかという気がしています。

	<p>きらめきさんのほうで全てを賄って市はもういいよという姿になってほしいなと思っています。ということなので、そんな思いがあって、最後に意欲をお聞きしたいと思っています。</p> <p>もう一点、事業計画書の33ページのBの丸三つ目のところに、再委託先とは定期的に相互情報を共有し」とあります。再委託先とは、なんでしょうかと、ここだけお聞きしたかった。以上です。</p>
太下会長	<p>最後から二つ目の質問は、市の市政の判断になりますので、申請者は、お答えいただく必要はありません。</p> <p>ほかの委員の方。質問の前に、質問の件数、複数ありましたら、件数を先におっしゃってください。どうぞ。</p>
綿江委員	<p>大きく三点についてお伺いしたいと思います。1点目は、アーティスト・イン・レジデンスについてです。日本中には様々なアーティスト・イン・レジデンスの拠点がありますけれども、今回のこの拠点の特徴を端的にお伺いしたいなと思います。</p> <p>具体的には、水と土の芸術祭の登竜門的な位置づけということをおっしゃっていたのですが、そもそも水と土の芸術祭自体がブランディング面では発展途上だと思うので、本当にそれだけでアーティストが集まってくるんだろうかという疑問を持ちました。また、PS 1 や 3331 など色々な廃校施設と連携を取っていくと仰っていましたが、必ずしも廃校施設間の連携ということがイメージが湧かなくて、具体的なイメージをお伺いしたいというのが1点目です。</p> <p>2点目はギャラリー展示についてです。なかなか、これは集客が難しいのではないかなと思っているんです。提案では本件について十分に言及されていないのですが、より詳しくご説明いただきたい。</p> <p>3点目は、体制についてです。ご説明のなかでは両分野で共通のスタッフを4名置くということでしたが、その4名の方は前の施設からのスタッフを引き継ぐということで、予算をちょっと拝見して、突合させていただくと、実は、芸術に詳しいスタッフは小川さん以外に存在しないのではないかと気付いたわけですが、そこら辺をどうするかと。</p> <p>あとは、4名の方も、雇用がテンポラリーというか、長期的に雇用されるということをお前提としていないように見受けましたので、指定管理者制度のなかでは労働条件・労働環境の厳しいところが数多くありますので、そこら辺のスタッフの将来的な面も含めて、どういうふうに考えているのか。この大きく三つをお伺いしたいなと思います。私からは以上です。</p>
太下会長	<p>質問のダブりは、まとめてお答えいただければ結構です。ほかの委員の方、いかがでしょうか。どうぞ。</p>
渡邊委員	<p>お聞きしたいのは2点で、冬場の利用促進という提案が書いてありますが、松林や海など、新潟の素晴らしい財産だと私も思っていますが、冬にどうやって活用していくか大きな課題であると思います。その辺りを具体的に、もう絶対だというような提案があるのであれば、それを教えていただきたいということ。</p> <p>それから、3世代交流、子どもたちのことも含めて、大畑少年センターの代替に</p>

	<p>なるのであれば、安全管理とか、また、そこに行くまでの距離が長くなるかと思えますので、その辺の配慮については、何か考えていることがおありであれば、教えていただきたいと思えます。</p>
橋本委員	<p>私からは、二つです。一つは、行政とどういうスタンスを取るかということ。私がとても魅力に思ったのは、それぞれディレクターというかたちで、個人で存分にやれる仕組みになっていて、大きな会社の企業体というよりも、個人のネットワークを生かした、あるいは実力を生かしたかたちになっている。</p> <p>つまり、挑戦して、冒険しようとする、行政の縛りがあるわけで、かといって、行政の縛りを大事にしないと、また、心配なところがあるわけで、どんなふうに、市の行政と向かうのかということ、理念として、スタンスとして素朴に思いました。でも、魅力は、極端に言えば、市の呪縛から離れられる可能性も大きいなという、そういう思いもあって、どんなふうにお考えなのかなと思いました。</p> <p>それから、鳥羽さんのほうは、三条のほうでとても大活躍されているんですけども、今度、こちらのお仕事が、常勤ではないんですけども、両方、大丈夫なのかなと。三条のほうは、辞めないんですね。そうすると、エネルギーや時間の配分で、どっちがどうなるのかなみたいなの。両方欲張ると、大丈夫かなとか、そこら辺の思いをお聞かせ願えればと思いました。</p> <p>あと、三つ目になっちゃうんですけども、私、へえと思ったのは、障がいをお持ちの皆さんの、雇用について、プレゼンがなかったんですけども、視点が入っていて、私は、これ、とってもすてきだなと思って、どなたでもいいですけども、障がい者の就労の援助をしたいという思いを、もうちょっとお聞きしたいなと思いました。以上です。</p>
長澤委員	<p>私から、特にそんなにたくさんお聞きすることがあるわけじゃないんですけども、資料を拝見したときに思っていた、このお二人出ていらっしゃるディレクターの方たちは、本当にこの会社のためにお働きになるんだろうかと、正直疑問に思っていたんです。で、こうやって、今日、お聞きしてみれば、内部の方でいらっしゃるということがわかったので、ああ、その心配は要らないんだと思いましたが、先ほど、こちらの委員からもご質問があったように、私も、三条でこれだけ実績を上げられた方が、新潟においでになって、三条を継ぐ人は、社内にいらっしゃるのかしらと、ちょっと不安を覚えたので、その辺のところをお聞かせいただければと思いました。</p> <p>全体的には、書類で拝見していたよりも、よりもなんていったら大変失礼ですけども、プレゼンを伺って、熱意が伝わってくるのを感じさせてくださりまして、ありがとうございました。</p>
太下会長	<p>私からも2点、芸術系の分野について、2点質問させてください。今日のプレゼンでも、アーティスト・イン・レジデンスの事業というのを、大きな事業として捉えていらっしゃるんですけども、ご案内の通り、この施設では、厳密には、レジデントができない。創作のスペースはありますけれども、アーティストの宿泊はできませんよね。そこの部分を踏まえて、このアーティスト・イン・レジデンスとはいったいどういうふうにお考えになっているのかというのが1点目の質問です。</p>

	<p>それと、もう一点が、やはり事業の中で、二葉アートスクールというものを開校されると。素晴らしいアイデアだと思うのですが、ご説明の内容がまだよく理解できなかったもので、より具体的に、どういう対象に、どのようなスクーリングとか、開校、講義をしようとしてされているのかということをご説明いただければと思います。</p> <p>質問、一通り、これで以上ですので、順不同で結構です。一問一答でなくて結構ですので、補足説明の方は出てきて、今の質問に一通り答えるようなご説明をいただければと思います。</p>
<p>申請者</p>	<p>私のほうから、雇用の関係、スタッフの配置について主に説明させていただきまして、その後、芸術系の質問につきましては、小川のほうから、体験系の質問については、鳥羽のほうから説明をさせていただきたいと考えております。</p> <p>まず最初に、スタッフの配置についてですけれども、全職員がどちらのほうにも関わるといような位置付けでスタッフを配置するというふうに考えております。</p> <p>ただ、実際に、今もう雇用に入っている段階ではあるのですが、その中には、インストラクターの経験者が3名と、関東の芸術系の施設に勤務していた者が1名、これは、作家さんでもあるのですが、学芸員をやって、この春、造形大を卒業する子がいるのですが、その子がいるので、大体の割合としましては、3対2で、芸術系が2、体験系が中心のものが3名という、今のところ雇用形態となっています。</p> <p>ただ、さっきも言いましたけれども、だからといって、こっちのほうをやらぬよというのは作りたくはないので、芸術系の子にも、3月9日の体験系の事業には、インストラクターのほうには行ってこれとか、あるいは、芸術系のところは、少し勉強してくれというような、今、アナウンスをしているところでございます。</p> <p>それと、鳥羽の勤務についてですけれども、確かに、今、三条グリーンスポーツセンターの施設長という肩書きで勤務をしております。最初のころ、三条グリーンスポーツセンターというのは、鳥羽が入ったころは、非常に、やっぱりなかなか大変な事業ではあったのですが、今は、非常に、鳥羽のほうは、ここを7年頑張ってきたかましまして、後継者が育ってきているというところなんです。</p> <p>そういった中で、実は、鳥羽が施設に付きっきりである時間というのは、今でも、そんなに多いわけではないです。その分、鳥羽は外に出て、先ほど言いましたけれども、いろんな講習会だとか、研修会だとか、あるいは、講演活動、三条市の防災の取り組みなんかもしているような状況ですので、そういったエネルギーを、こちらのほうに、10日から15日、振り向けていただきたいと思います。</p> <p>ただ、その10日から15日につきましても、もちろん、8時間勤務とか、別にそういう制限をかけているわけではなくて、事業の内容によっては、もしかしたら2時間の日もあれば、逆に8時間の日もあるし、そういった中で、相対すると、日にならすと、そういうふうな配置になるというふうな考えでおります。</p> <p>いずれにしても、当面は、こちらのほうを重点的に見ていただくようなかたちにはなると考えております。</p>

	<p>芸術系のところでの補足ですけれども、芸術系のスタッフは、大体2名、今は雇用ということで考えているのですけれども、ここにつきましては、そういう国際交流は、小川のプロフィールを見ていただくとわかるんですが、結構、海外の国際交流なんかもしている関係があります。それは、小川さんが、今代表を務めている「文化現場」というNPO団体があるんですけれども、そちらの全面バックアップを受けて、こちらの事業にお手伝いをいただくというのを今考えておりますので、なかなか常駐スタッフでは足りない部分については、そういったNPO団体のお力を傾注していきたいと考えております。</p> <p>あと、先ほどの再委託というものについてはどういうものがといいますと、主には、維持管理の部分で、例えば、うちもビルメンテナンス会社ではあるんですけれども、なかなか一方で、自動ドアですとか、あるいは、消防系の難しいものですとか、電気関係の高圧のものとなると、別に資格がいるんですね。そうなったときに、うちだけではできない部分については、施設維持管理の一部分をそういった会社をお願いするというようなかたちになります。</p> <p>それと、先ほどモチベーションを上げるために、なるべく利益が出るようにして、その部分で、もし仮にも利益が出たら、それは、従業員に分配するようかたちにしていきたいというような提案がありますよと、確かにあります。</p> <p>実際に、ただ、これは非常に難しいことです。そういった中では、この第1期中で、それが全てできるかといったら、私は、多分できないと思います。そういった中で、やっていく中で、いろいろなものが見えて、これを1期終わって、次の段階のステップに進んだときに、新しい何かそういったことに振り向けていかれると私たちは考えておりますし、最後に雇用形態を見ると、どうも、うちは、長期にやる気がないんじゃないかというふうにとられがちですけれども、実は、今、雇用予定の職員については、小川さんとか、鳥羽とは別にして、20代、30代の子です、入ってくる子が。今のところの予定者として入ってくるのは。そういった子たちを、そんな途中で切るなんていうことは、当然しません。</p> <p>そういった中では、1年間は、まずこの中でやってみて、その中で、2年目以降、正社員登用を随時やっていくというような条件で今採用しておりますので、そういったところになるので、私たちは、この施設を、新潟市の若者の雇用のためにも役立てたいという気持ちでおりますので、長い間、この施設を末永く担当できることを切に願っております。</p> <p>具体的な事業につきましては、小川さんと鳥羽さんのほうから、説明のほうお願いします。</p>
申請者	<p>それでは、私のほうからの回答になりますが、アーティスト・イン・レジデンスに関わる質問が幾つかあったので、かぶりながらの返答になるかもしれませんが、もし、答えていないところがあったら、後で、またご指摘いただければと思います。</p> <p>まず、アーティスト・イン・レジデンスのどういうアーティストを考えているのかというご指摘に対してですが、実際、3カ月で作品が作れるのか、短いのではないのかということもご意見としていただきました。実際そうなんです。正直申し上げて、この仕様書というのが最初にあります。その仕様書には、アーティストは、</p>

3カ月の滞在以内、そして、中堅または新進の作家を対象とするみたいなのは、もう初めの決め事としてあるんですね。ただ、その決め事の中で、どれだけ工夫して、このレジデンスを効果的なものにできるかが、私たちに委ねられたところかなと思っています。

ですので、アーティストに関しても、具体的に、こういうアーティストという指示はありません。むしろ、芸術家等という表現になっているので、私といたしましても、その芸術家等を、どういった人たちを対象にしようとするのかということでもいろいろ考えております。だけれども、そこでも、現代美術作家を対象とするみたいに言い切ることは簡単ですけれども、それも、する必要がないのかなと思っています。

すごい古典的な仕事をされる人がいたり、職人的な仕事をされる人がいたり、あるいは、パフォーマンス的な、造形だけではない作家性のある人であったり、いろいろな方が、今や芸術家、表現者として存在している今日ですから、芸術家の枠というか、具体的なこういう分野の人、こういう表現スタイルの人という枠は、決めないで取り組んでいきたいと思っています。むしろ、公募なので、いろいろな応募が集まる、応募の多様性の中から選定委員が選んでいくというほうが、開かれていて、効果的かなと考えます。

もし不振に終わったとき、あまりにもレベルの低い人しか応募がなかったとき、どうするのか。これが一番怖いですよ。それで、さあ、アーティスト・イン・レジデンスの作家を募集しています。どうぞ皆さん申し込んでくださいねと宣伝しても、やっぱり来なければそれまでになるので、やっぱりこちらから働き掛けていくようなこともしていかなければいけないかなと思っています。じゃあ、具体的にどういう作家の目星がありますかということについては、これも、あまり具体名を挙げて、誰々さんと誰々さんと言ってしまうと、ああ、そういう系統の人かみたいに捉えられるのもちょっと惜しいですし、かといって、また、たくさん挙げ過ぎるのもあれなので、そこは控えさせていただきますが。

じゃあ、どういった人が、あなたの頭の中にあるのかといたら、私自身、倉庫美術館を振り出しに、各アーティストとの仕事を随分やってまいりました。新潟AIRでもそうですし、大地の芸術祭でも、NPO法人越後妻有里山協働機構の理事として作家と関わりましたし、水と土の芸術祭しかりですし、さまざまなタイプのさまざまなアーティストとの関係があり、また、アーティストはアーティストの関係があります。

ですから、こういった趣旨で、こういったレジデンスをやるに際して、興味を持ちそうな人、また、参加してもらうことによって、この施設が、より効果的に発信できるであろう人を人選していく、あるいは、声を掛けていくみたいなことを考えておりますので、具体的なお名前については控えさせていただければと思います。

それと、水・土の登竜门的なイメージを持たせたいという話を私は申し上げました。でも、水・土は、まだそれほどのブランド力はないではないかというご指摘ですが、確かにそうかもしれないですけれども、実際、私の周りには、今年の水・土に参加するぞという思いで何年も前から準備してきたプランを抱えながら、公募枠

がなくなって、参加できないという、悔しがっている作家がいっぱいいるんです。そういうことを考えると、そういう性格を持たせるのも大切じゃないのかなという気がしています。

そして、展示したって、人、来ないじゃないか。確かにそうなんです。このレジデンスって、3カ月滞在して、作品を作りなさい。それで、住民と交流しなさいというのがメインですけども、じゃあ、作家にとってのメリットは何か。本来、作家というのは、その作品を発信して、見るべき人に見てもらって、たくさんの人に見てもらって、作家としての実績が上がっていくので、作るだけ作って終わりじゃ駄目なんです。

だから、水と土の芸術祭は、ある意味、発表の舞台ですから、発表の舞台があることによってモチベーションも上がるわけですが、作るだけ作る、だけでは作家としては魅力に欠けるんじゃないか。

だけれども、この新潟市芸術創造村のレジデンスに参加することによって、作家のメリットに見いだせるのは何かというと、一つは、水・土というものを絡ませていきたいし、展示だって、いずれ水・土に、あるいは水・土とは違って、新潟市がそういう芸術祭をやっている文化都市だということから、見せ方を考えていくということも考えたいと思いますし、それと、実際、このアーティスト・イン・レジデンスの仕様書で言うと、いわゆる世の中のレジデンスに比べたら、あまりにも縛りが多過ぎて、魅力というか、環境的に恵まれていないというか、約束されていない部分が多いんですね、今の仕様書では。

泊まる場所もそうですし、お金も少しは出るかもしれませんが、3カ月、制作して何のメリットがあるんだ。展示したって、展示する場もない。会場でやったって、人が来るか・来ないかわからないみたいところで、意欲的な作家が参加するかといたら、今の仕様書ではやっぱり難しいです。これは、ある意味、行政の縛りとの戦いです。

だからといってやめるのではなくて、メセナ活動とか、クラウドファンディングとかで、少しでも作家の制作環境を整えて、行政の縛りとの戦い、戦いという言い方は変ですけども、やっぱり行政と一緒に協議しながらやっていくということが、全ての場面で大切だと思っています。行政と協議して、そういう活動ができるのかといたら、ある意味、水と土の芸術祭だってそうなんです。新潟市の中に実行委員会があって事務局がありますが、ディレクターというのは、大体外部の人たちがやってきます。そうすると、ディレクターの考え方が、そのまま新潟市の実行委員会の中で通るか・通らないかといたら、やっぱりいろいろな縛りがあるのも実際に、だからこそ、アートとか芸術とかというのは意味があるし、素晴らしいと思います。

一部の好きな人、お金のある人、余裕のある人が、発表して終わりではなくて、税金を使って何でそれをやるのか、その意味はどこにあるのか、そして、縛りがたくさんある、決まり事がある中で、クリエイティブなことをしていくには、どんなに課題や乗り越えなきゃいけない問題があるかということと一緒に相談しながら、協議しながら乗り越えていく。それこそが、クリエイティブであり、新潟市が文化

	<p>創造都市としての基盤をつくれるのではないかなと思っていて、委員の皆さんからいろいろご指摘いただいたことは、おっしゃる通りではありますけれども、それを行政と協議する中で乗り越えていきたいという思いが全般の答えになります。</p> <p>それと、二葉アートスクールに関しては、これも、いわゆるそういう出会いの場をつくりたいという思いです。具体的に誰を対象にして、何をしたいのかということでは、市民ディレクターや、市民プロデューサーみたいな人を育てる場をつくっていききたいと思っている。新潟でも、制作する人や、映画を見たり、音楽を聴いたりするのが好きな人はいます。</p> <p>その人たちをうまくつないで、場をつくる人、展示会の場、効果的な場、あるいはパフォーマンスの効果的な場、宣伝の仕方、見せ方、お金の集め方、そういうのをコーディネート、ディレクションする人が欠けているから、なかなかニーズがあっても、それが形にならなかった。そういう人を育てるような場として、この講座スクールが、この施設の中にあったらいいと思います。</p>
申請者	<p>撤退するかというご質問ですが、2年前から（基本構想の）検討委員会のときから準備してきているので撤退はしません。当社は、障がい者の清掃については、もう立ち上がり時期が、アピリンピック（全国障害者技能競技大会）のときから、清掃の指導をずっと指導してきました。県内では第一人者だと思っております。</p> <p>指定管理の中でも何とか生かしたい。</p>
太下会長	<p>これで、環境をサポートする株式会社きらめきのプレゼンテーションおよびヒアリングを終了いたします。</p>
	<p>～休憩～</p>
太下会長	<p>それでは、申請者からのプレゼンテーションを行っていただきます。時間は60分以内です。55分経過時と60分経過時にベルを鳴らし、お知らせしますので時間厳守をお願いします。なお、申請者へは、提出済みの書類に基づきプレゼンテーションを実施していただくこと、そして、事業計画書および公開プレゼンテーション資料に、第三者の個人名または個人が特定できる記載がある場合は、相手方に確認を得ているか、公開プレゼンテーションで説明していただくよう通知をしているとのことですので、その点を含めプレゼンテーションを実施してください。準備ができましたら始めてください。</p>
申請者	<p>本日は再度、事業説明の機会をいただき誠にありがとうございます。</p> <p>当社は11年前に、北区福島潟にある新潟市の環境学習型宿泊施設「菱風荘」の指定管理者に選定されて以来、現在では16の指定管理事業に携わらせていただいております。その内容も、本施設の業務に関わる教育施設、文化施設をはじめ、観光施設、スポーツ施設と多岐にわたっております。また、今回、構成員として参加しております株式会社新潟ビルサービス、グリーン産業株式会社においても、県内各地で当社を上回る指定管理実績を有しております。その多くは当社を含めた三つの共同事業体として、強固な信頼関係に基づいて運営を行っております。ただ、今回はより専門性が求められる施設でございますので、この3社に加えて、広告分野やイベント企画で実績が豊富な株式会社けんとう放送と、教育分野において独自の取り組みを行って幅広いコンテンツを持っておられる、NPO法人みらいズ works</p>

さまを加えて、事業運営がより広がる共同事業体として応募させていただきました。私たちは、毛利元就の「三本の矢」の逸話ではございませんが、1社では小さな力でも5社が一つになって協力することで、大きな力となって本業務に取り組んでまいりたいと思っております。また、当グループは、各社が本当にそれぞれで専門性を十分に発揮し、本業務をどのような困難があろうと、最後まで全力でやり遂げることをお約束いたします。これから事業計画を各担当より説明させていただきますので、よろしくお願い申し上げます。

それでは、事業計画の記載順に従って、ご説明させていただきます。まず、経営戦略・経営理念です。本施設は、文化・芸術活動の支援と青少年の体験という二つの機能を持ち、日本海を望む素晴らしいロケーションの中に新しくオープンする、全国的にも注目の施設です。私たちは、文化・芸術を愛おしむ市民と、生きる力を育む青少年が行きかう場の創造を運営テーマに掲げ、ここにお示ししております四つの経営理念の下、当グループ各社が力を合わせ、オール新潟で実行することにより安定した運営をお約束いたします。私たちは、にいがた未来ビジョンにある「新潟市が目指す未来に向けた都市づくりの理念」、新潟市教育ビジョンにある「未来を担う心豊かな子どもの育成」、新潟市文化創造都市ビジョンにある「文化・芸術の持つ、創造性を生かした都市の活性化」といった行政施策に対して、本施設の運営を通じて、ともに発展していきたいと切に願っております。青少年がさまざまな体験を通して考え、学び、関わる豊かな心を育み、国内外のアーティストが滞在しながら行う創作活動の支援と、市民との交流ができる本施設の独自性を生かし、松林に囲まれ日本海を望む新潟らしいロケーションの中、市民、地域の皆さまとともに、青少年の健全な育成と文化の創出を図ってまいります。

私たちの理念を効果的かつ具体的に具現化するため、当グループは専門性が高く、いずれも新潟市に本社・本部を置く五つの法人による共同事業体として、本業務に取り組んでまいります。全体を統括する愛宕商事を中心に、体験プログラムの企画はみらいズ works、広報・PR・イベント企画はけんと放送、維持管理部門はビルメンテナンスでは県内最大手の新潟ビルサービスと、ビッグスワンのピッチ管理でJリーグベストピッチ賞を受賞したグリーン産業が、それぞれの専門性を生かし責任体制を明確にした上で、連携して業務に取り組んでまいります。さらに、本施設の最大の特徴である、芸術創造村と国際青少年センターが一体となり有益的に機能するため、私たちは新たな視点を加えます。現在、新潟市内には幼稚園、保育園、認定こども園で577施設、29,080名。小学校、特別支援学校が110校で39,695名の未就学児童および児童がおります。新潟市内には、これらの児童の受け入れ施設は数多くあり、私どももその一部の指定管理者として業務を行わせていただいております。しかし、その上の中学、高校生向け施設は数が少ないと感じておりました。今回、大畑少年センターの事業を移管する施設の名称は国際青少年センターです。少年に青年が加わりました。新潟市内には中学校が57校で19,136名、高校が29校で23,529名、中高生合計で42,665名で、小学校の児童数39,695名を上回ります。私たちは、この年代層にも参加いただけるプログラムやイベントも積極的に展開して、両施設を有益的に機能させる運営を行います。具体

的なプログラムについては、後段で担当よりご説明させていただきます。

さらに、本事業遂行に必要な体制についてご説明させていただきます。当グループの構成法人各社の従業員数は約 2,000 名。指定管理の実績も契約数で 50 件を超えており、その内容もこども創造センター、アグリパーク、菱風荘などの体験型教育施設や、旧齋藤邸別邸や砂丘館などの歴史・文化観光施設など、本業務に求められるあらゆる施設運営経験があり、それぞれの分野や業務に必要な人材、スキル、人脈を十分に備えております。災害や事故等の不測の事態が起こった場合においても、総力を挙げての早期対応が可能です。先日の市内の大雪に際しても、グリーン産業職員の迅速な除雪対応とグループ全社の緊急応援にて、当グループの他の施設では、午後には通常の業務を行うことができました。また、災害や事故等の不測の事態に加え、本施設のような新規開業施設においては、他の施設に比べ想定外のリスクが多く、立ち上げ経費を含め安定運営までの経費拡大も懸念され、資金リスクの分散も安定運営には不可欠な要素であると考えます。私たちは、事業計画書の 22、23 ページに記載のとおり、それぞれの法人が健全経営を実現しており、資金面を含め、本施設があらゆるリスクに対応しながら、安定して運営していくことが可能なグループ構成となっております。以上、三つの方針の下で共同事業体としての利点を生かした運営を行うことにより、適切で安定な施設運営が十分担保できるものと確信しております。

次に、開業準備に関してご説明いたします。本施設の開業は本年5月です。選定後2カ月、契約日からは1カ月という短い期間での開業準備は、私たちが直面する大きな課題です。当グループ、愛宕商事、新潟ビルサービス、グリーン産業の3社はいくとびあ食花、こども創造センター、アグリパークなど他の新規開業施設において、短期間での開業準備を経験しており、本施設においてもその経験をもとに優先準備をつけ、円滑に開業準備を行い、万全を期します。

主要項目の準備についてご説明いたします。人材の採用については、事業のキーマンである統括館長、副館長、語学堪能者を含むチーフ等の主要メンバー5名は、当愛宕商事現指定管理職員を内部移動させ配置いたします。具体的には、統括館長に現こども創造センター館長を、施設管理責任者の副館長には現アグリパーク副館長を、文化担当チーフには現新潟テルサ事業マネージャーを、青少年育成にはアグリパークおよびいくとびあ食花の現インストラクター2名を配置予定で、すでに該当者には内示しております。また、新規採用予定の技能者2名は、受契を前提にすでに内定しており、さらに、大畑少年センターの職員さまとは、選定後、速やかに優先交渉をさせていただきますが、移籍希望者がいない場合も想定して、愛宕商事職員のうち、スキルを考慮して数名をピックアップしております。トレーニング関係は、主要配置職員および大畑少年センターよりの移管職員が、現状業務にて基本的な業務をこなしており、密度の高い打ち合わせを行うことにより、即戦力として業務を開始できるものと考えております。新規採用者については、当グループ関連施設において、OJTにて基本研修を実施いたします。ウェブサイトに関しては、後段でお示しいたしますが、けんとう放送においてすでに仮デザインを終了しており、3月中にはプレアップが可能です。利用受付は他の施設において同様業務を行って

おり、速やかに教育委員会さまよりの引継ぎが可能と考えます。マニュアルに関しては安全面を最優先し、現危機管理マニュアルを本施設向けに加筆・修正して作成し、開業前には全員で訓練を実施します。管理・運営方法は、本提案書作成時に運営案を作成しており、実情に合わせて修正が必要な場合は修正をいたします。アーティスト・イン・レジデンス関連業務は、選定委員会を新潟市さまと協議して、3月中に提案して決定いたします。私たちは事業計画書作成にあたり、具体的に運営を想定して各案を作成しておりますので、ご提案させていただいております事業計画の準備を5月開業に向け、誠意をもって進めさせていただきます。なお、弊社内定済み職員には選定の可否に関わらず、一部作業を進める指示をいたしております。

次に、施設の平等利用、利用促進案をご説明いたします。ここに掲げました4項目を基本姿勢に施設運営を心がけます。特に利用者ニーズを越え、利用者ウォンツを引き出す努力とその実現に尽力いたします。2017年に制定された「ユニバーサルデザイン 2020 行動計画」によりますと、国民全体を巻き込んだ、心のバリアフリーの取り組みを展開することになりました。また、2020年の学生指導要領改訂に合わせ、全ての子どもたちに心のバリアフリーを指導する方針も決まりました。本施設は外国人アーティストを含め、さまざまな来場者が訪れるため、私たちもその趣旨に賛同して接遇マニュアルを整備して対応いたします。また、減免措置についても、条例を遵守して運用いたします。私たちは、各施設運営で培ったマーケティング力を駆使し、利用者のウォンツを分析しておもてなしの心を持った接遇を心がけた運営を行い、全ての利用者がリピーターとなっていただけるような努力を継続してまいります。また、現在はスマートフォン時代です。外国人アーティストや若い方たちが、当施設でも手軽にインターネットに接続できるフリーWi-Fiの環境を整備することで、創造的な文化芸術活動を支援いたします。当然ですが、苦情やクレームは顧客獲得のチャンスと捉え、適切に対応してまいります。

市民交流事業について説明いたします。指定管理業務成功の鍵は、地域の皆さまといかに連携できるかが大きなポイントです。指定管理者が独り善がりな運営とならないように常に心がけ、地域に愛される施設運営を行います。近隣自治会の皆さまは、本施設ができることによる交通量の増加や駐車場の問題、イベント時の混雑に関してのご不安を感じておられると思います。私たちは指定管理者に選定後、速やかに近隣自治会の皆さまをお訪ねして、誠実に本事業に対するご理解とご協力をお願いいたします。また、ご意見やご提案なども伺いながら、地域に愛される事業を進めてまいります。具体的な提案といたしましては、いつでも市民が訪れていただけるように、1階ラウンジを市民アートサロンとして開放いたします。サロンは子どもたちの居場所としても活用し、当スタッフやボランティアが見守り隊として子どもたちに接し、居心地よいサロンにいたします。このサロンには、軽飲食を提供できる自動販売機を設置する予定であります。また、芸術創造村・国際青少年サポーターズを、他施設でのサポーター獲得ノウハウを生かして設立して、新たなファン層に訴求いたします。本施設の周辺には、みなとまち新潟が育んだ歴史的建造物、美術館、学校などがあり、八つの文化施設の協議会である異人池の会が連携し

ながら文化活動を行っております。当グループの新潟ビルサービス、グリーン産業は、この異人池の会を主管する砂丘館および旧齋藤邸別邸の指定管理者であり、地域の文化、教育、観光などで貢献をいたしております。私たちはこのネットワークを生かし、ここに掲げております700名以上が参加する夜間イベント「新潟竹あかり花あかり」に合わせた共同イベントを実施したり、新潟市美術館が中心となり、四つの施設をつないだ「サクラリー」などの連携企画に参加するだけでなく、当グループとしてもこの異人池の会に新規入会して、地域の文化活動に貢献してまいります。また、当グループが他の施設運営でご協力いただいているボランティア組織の皆さまにも、本施設においても連携をお願いしてまいります。

文化・芸術支援活動についてご説明します。当グループは創作活動を行うアーティストをさまざまな角度で支援する一方、アーティストが行う創作活動を通じて、青少年をはじめとする市民と広く交流を行うことによりネットワークを構築し、文化・芸術に対する市民意識の高揚につながる、さまざまな事業を展開します。私たちがアーティスト・イン・レジデンス事業として重要視しているのは、本施設がさまざまなアーティストにとって、創作活動に専念できる素晴らしい環境であるとともに、アーティストが市民や地域と出会いつながることで、新潟市の持つ自然、文化、食、景観などがさらに磨かれ、新たな価値や文化が広がっていくことです。滞在アーティスト募集については、他の自治体も大変苦労されていると伺っています。私たちは広報・PRの専門家である、けんと放送を中心に、本施設がいかに素晴らしい施設であるかなど、さまざまにプランディングを行い、メディアや電波、インターネットやSNSなどあらゆる方向を駆使して発信してまいります。また、公募要綱は英語、日本語といたしまして、全世界に向け発信いたします。さらに、当グループの人脈をフル活用して、各団体や協会に公募の趣旨を丁寧にご説明して、ご協力をお願いしてまいります。招聘（しょうへい）アーティストの選定にあたっては、新潟市さまと協議を行い、選定委員会で決定いたします。現在の予定は当館統括館長、当館事業顧問に、アーツカウンシル新潟のプログラムディレクターを加えていた3名に、文化・芸術部門関係者、教育関係者数名を加え、6名から7名程度にしたいと考えております。なお、当館事業顧問に前新潟県立近代美術館館長の徳永健一氏にご就任いただき、選定業務以外でのさまざまなアドバイスをいただくこととなり、就任に関しても事前にご了解を頂戴しております。

ここで、徳永健一氏について少しご紹介させていただきます。徳永氏は新潟日報社の事業局長、新潟日報事業社社長を経て、新潟県立近代美術館館長に就任し、一昨年まで館長を務められておりました。現在はNSG美術館の統括ディレクターの傍ら、地元芸術家の支援活動などにも尽力されております。徳永氏の人脈は、本施設の活動に大きく貢献いただけるものと思います。

公募の結果、万が一応募者がなかった場合、私どもの人脈を駆使して個人、団体さまに本事業の趣旨を丁寧にご説明し、応募や推薦を頂戴した上で、数名のリストを選定委員会に提出して協議いただく方法を取り、呼びたいアーティストではなく、意欲あるアーティストを地道に集めてまいりたいと考えております。なお、外国人アーティストの招聘に限り、ビザや航空券、宿泊手配などの関係もあるため、

	<p>当愛宕商事旅行事業部長をオブザーバーとして会議に出席させ、専門家の立場から滞在アーティストの支援を行います。私たちは、この委員会を単にアーティストの選定に限らず、本指定管理事業全般の外部評価会議と位置付け、ご指導やご助言を頂戴して運営の参考にさせていただきます。滞在アーティストの支援として、職員がコンシェルジュマインドを持ち、滞在アーティストが安心して制作に関われるよう全力を尽くします。また、外国人アーティスト招聘のため、語学堪能な職員を常駐させるとともに、本社も含め、語学力堪能職員の応援体制も確立いたします。さらに、招聘アーティスト以外のアーティスト支援として、作品発表の場を提供するなどの支援も行ってまいります。</p> <p>続いて、市民交流事業についてご説明します。今年の7月より行われる「水と土の芸術祭 2018」のコンセプトは「メガ・ブリッジつなぐ新潟、日本に世界に」です。私たちグループでは、こども創造センター、砂丘館、旧齋藤邸別邸などの施設で、現在、水と土の実行委員会に協力しており、その趣旨やコンセプトは十分に理解いたしております。水と土の5本柱の1番目が、市民が主役の芸術祭を目指す市民プロジェクトです。私たちは本施設をこの市民プロジェクトの拠点施設と捉え、現在、約100団体が応募している市民プロジェクトの団体さまと連携し、ここにお示しいたしましたような企画例を、さらに発展させた市民交流事業を展開してまいります。本施設は、芸術祭のサテライト会場として、ここまで説明いたしましたアーティスト・イン・レジデンス、市民とアーティストの交流拠点のほか、水と土のアーカイブギャラリーとしての機能が求められております。専門的な知識のない市民や子どもたちでも分かりやすい工夫を行い、芸術祭終了後も市民主役の芸術祭、市民と文化を結ぶ懸け橋となるような文化ギャラリーをつくってまいります。また、市民の制作活動の場である市民アートスタジオを積極的に告知して、交流活動を促進いたします。</p> <p>これまで、私たちグループではこども創造センターにおいて、次世代を担う子どもたちの創造性を育む体験や、ワークショップに取り組んでまいりました。これら業務とのコレクションは、本施設を運営する上で大きな力となります。この貴重な経験をもとに、本施設の運営においても他の施設と緊密に連携して、青少年と文化・アートをつなぐ拠点施設としての役割を果たしてまいります。</p>
<p>申請者</p>	<p>これまでプレゼンテーションしました新潟市独自の芸術・文化の継承、発展を促す文化・芸術活動支援事業とともに、当芸術創造村、国際青少年センターの2本柱、青少年体験活動推進事業について説明いたします。</p> <p>まず、画面に示した内容の根拠についてお話しさせていただきます。青少年体験活動推進事業と文化・芸術活動支援事業の2本柱の両立や融合があつてこそ、日本で初めての文化・芸術を愛おしむ市民と、生きる力を育む青少年が行きかう総合施設、コミュニティの創造になると考えます。また、新潟市文化創造交流都市ビジョンや教育ビジョン、全国レベルの教育改革が進んでいる今だからこそ、こうした使命を果たす文化教育施設の実現が、新潟市に与えられた喫緊の課題だとも考えております。</p> <p>次に、この事業で最も大切なことは、仕様書で示された、グローバル社会に対応</p>

し、次代の新潟を担う青少年が、社会を生き抜くために必要となる資質や能力の育成という目標の実現です。当然ですが、こうした目標の実現なくして、事業の成功はあり得ないと強く認識しております。皆様ご存じのとおり、グローバル化や核家族化、都市型社会が進む中で自己の豊かな生き方を求めるには、確固たる個人のアイデンティティが必要となっています。また、確固たるアイデンティティを形作るものとして、自ら課題を見つけ、考え、解決するという生きる力や、思考力、判断力、表現力、そして調整力、思いやり、があると言われてしています。さらに、こうした生きる力や資質・能力を培うには、学校や家庭だけではなく地域力を必要とします。言い換えれば、新潟市教育ビジョンにうたわれるとおり、学・社・民の融合による人づくり、地域づくり、学校づくりがベースになると確信しております。また、生きる力や大切な資質・能力は、実生活の中で感動を伴ってこそ培われるものであります。散文的に表現すれば、人と交わり、人を思い、そして自分を知るのだと思います。このことは、冒頭の経営理念、市民、地域とともに、青少年の健全な育成と文化の創出の具現化にほかならないと考えております。以上の根拠をもって、画面では目標、学・社・民融合の運営方法、そして、何よりも利用する学校や団体や、ご家庭や青少年が期待と安心を持って活用してもらうことを、基本的な考えとして簡潔に表しました。

次に、具体的な事業内容の団体向け体験プログラムの提供と実施について説明します。青少年が安全に楽しく、寝食を共にする自主、自立、共同の宿泊体験活動は、昔から教育的価値が高いものとされています。128所、畳部屋も含めるとさらに24所を持つ当施設は、そうした宿泊体験活動の場を学校や学年や、学級や子ども会などの団体に提供することを最も大切な使命とします。ちなみに、現在、新潟市内で宿泊体験ができる公的な施設は巻の県立青少年センターが閉鎖中であり、当グループが指定管理するアグリパーク以外はありません。活動内容の基本は、利用団体の自主企画、運営プランを主としますが、利用団体ニーズがある場合は画面に提示したような、価値ある内容のプログラムの提供と実施を行います。いずれにしても、定型的なプログラムの提供ではなく、いくとびあ食花団体体験プログラムと同じように、利用団体との事前打ち合わせを密に行い、活動者、引率者、スタッフのみんなで共につくり上げるプログラムを目指します。教育界でよく言われていますが、物の提供ではなく、出来事の提供を大切にいたします。

次に、人間関係づくりプログラムについて説明いたします。芸術創造村・国際青少年センターが提供するプログラムの中核を担うのが、その名のとおり、想像力の育成とこれからの社会を生きるための社会性や協働性といった、人間関係能力の育成です。実は、全てのプログラムの中に人間関係能力育成は含まれるのですが、それに特化したものとして、教育委員会が推進する青少年が実体験を通して、喜びや自信を持って人間関係づくりを学ぶという、人間関係づくりプログラムを実施いたします。私自身の経験では、教科担任制や成績付けが伴う今の学校では、このプログラムを生かすことは大変困難です。しかし、このプログラムが学校やご家庭とともに広く実施されるようになると、新潟市の子どもたちの自己肯定感の低さや、いじめ問題の解消に大きくつながるものと確信しております。

<p>申請者</p>	<p>それでは、人間関係づくりプログラムについて説明させていただきます。人間関係づくりプログラムとは、仕様書で示されましたが、体を使いながら集団で課題を解決する活動を通じて、挑戦、協力、葛藤、達成感などを体験することで自己肯定感を高めるとともに、仲間との信頼関係を築くことを目的としております。みらいズ works では、人間関係づくりの授業支援を、小学校、中学校、高校と数多く実施してまいりました。それらの実践やノウハウを生かして、人間関係づくりプログラムを提案します。</p> <p>まず、学級風土づくりと題しまして、一人一人が安心して意見や思いを表現し、互いを尊重し合える関係を築くプログラムを実施します。小学校での授業支援では、ファシリテーションをベースに、付き合う、認め合うスキルトレーニングをしたことで、自分の意見が認められてうれしかったなど、自己肯定感を向上するきっかけにもなりました。また、中学校ではいじめやSNSなど、日々の問題をテーマに取り入れながら、当事者意識を持って話し合いや体験活動をすることで、日々の自身の行動や考え方を見つめ直す機会になりました。例えば、いじめをテーマにした場合、なぜいじめてしまうのだろうかなど本旨的な課題にすることで、いじめる人は寂しいのではないだろうか、その寂しさに気づき、避難するのではなく分かろうとすることが大切ではないだろうか、などの話し合いがされたことがあります。相手の立場や考えに寄り添えること、自分とは違う価値観に気付けることが信頼関係を築く上で重要だと考えております。以上のような実践や、そこから培ったノウハウを踏まえながら、各学校や個人のニーズに則したプログラムを提案し、青少年が多様性を尊重しながら、思考力、判断力、表現力を磨き、これからの社会をたくましく生き抜いていく力を育ててまいりたいと考えています。</p> <p>次に、リーダーシッププログラムと題し、生徒会や学年委員など、人間関係を構築したり集団活動をする上で、中心的存在となる層を対象に、リーダーシップや課題発見、解決能力、レジリエンスなどを育むプログラムについてです。これらについても、みらいズ works では今までも、各学校のニーズに応じて支援をしてまいりました。学校全体で動くことが難しい大規模校もあり、リーダーを中心に人間関係を豊かにしていこうというニーズも高いため、プログラムとして提案させていただきました。リーダーとして引っ張る、「〇〇してください」と仲間たちを導くだけでなく、みんなが話しやすいムードをつくり支援をする、励ます、結果だけでなく挑戦する過程も大切にするなど、自分の良さや集団の特性を生かした、これからの社会に求められるリーダーシップ観を身に着けていくことを目的としております。</p>
<p>申請者</p>	<p>続いて、青少年健全育成事業の個人利用者向け体験活動について説明いたします。こども創造センターを利用される保護者やかつての私の教え子から、「子どもに宿泊体験や芸能等の集団活動を体験させたくて大畑少年センターを利用しています」という声をよくお聞きします。こうした声にお応えするためにも、大畑少年センターの事業を確実に引き継ぎ、個人や家庭から申し込める画面に明示したような、楽しく、やりがいのある体験活動やワークショップを展開いたします。なお、明示にはありませんが、家族でも参加できるような事業も積極的に実施したいと考</p>

	<p>えております。さらにもう一点、誰が指導者や支援者を務めるのかが記載してありませんが、実は次の画面にお示しするとおり、市民交流事業の一環として運営を進めたいと考えております。</p> <p>現在、新潟市こども創造センターにおいては、数多くのサポーターや水と土の芸術祭市民プロジェクトの皆さんと、センターの協議によるワークショップが展開されています。こうしたシステムを踏まえ、学・社・民融合の運営という基本方針の具現化を図りながら、市民交流事業としての展開を図ります。具体的には先ほど述べたように、サポーターズ、アーティスト・イン・レジデンス、地域有志住民の方、指導者養成講座修了者などの皆さんに、体験活動の支援者、指導者として活躍していただく所存です。なお、水と土の芸術祭サポーターズと芸術創造村・国際青少年センターサポーターズとの兼任は、可能な限り進めてまいります。</p> <p>次に、自由な遊び場、居場所の提供事業についてです。今の子どもたちは少子化や治安などの諸般の事情から、放課後や休日に自分の意思で集い、遊べる場を奪われています。また、小さい頃からの異年齢による集団遊びに不足し、集団生活になじめない青少年も多くいます。こうした子どもたちへの機会と居場所の提供を、芸術創造村、国際青少年センターの一大事業とします。また、市民との交流や、安心・安全を市民活動の一環としても広めてまいりたいと思います。</p> <p>次に、指導者育成講座の実施および講座修了者の登録について説明します。私は長年、学校教員やこども創造センターや大学の講師を務めて、子どもたちの生きる力や創造力などの資質・能力を育むことは、並大抵でないことを痛感しております。また、指導者、支援者がその力量を高め、研鑽（けんさん）する機会や場を持ってないことにも気付かされています。そこで、芸術創造村・国際青少年センターの事業として、造形教育や総合学習などを含むプログラム指導者養成講座と、人間関係づくりプログラム指導者育成講座を開催いたします。また、先ほど述べたとおり、講座の修了登録者の皆さんには芸術創造村・国際青少年センター体験活動の指導者、支援者などになり、実地研鑽が可能なシステムを構築いたします。</p>
<p>申請者</p>	<p>人間関係づくりプログラム指導者養成講座のカリキュラムや指導案に関しては、すでに作成に入っております。センター職員とみらいズ works が連携して運営をしていく予定です。人間関係づくりプログラム指導者養成講座の実施についてですが、現実のプログラム、指導者養成講座を受講した人を対象に、スキルアップ編として実施をいたします。青少年と関わる上での悩みや課題を出し、それをどう解決、対応していくのかをケースワーク的に考えるとともに、人間関係づくりを構築する上で役立つプログラムデザインの考え方やモデルを学び、実践力を養っていきます。なお、青少年と年の近い大学生や専門学校生に加え、教員、すでに学習支援ボランティア等で学校に関わっている方など、幅広い層を対象として募集をいたします。受講後は修了証を発行し、今までお話ししている授業の企画、運営サポートだけでなく、この後ご説明します自主事業で考えております中高生の居場所等でも、寄り添いや中高生初の企画の活動支援などもしてもらおう予定です。</p> <p>それでは、次の自主事業の提案の画面をご覧ください。新潟市内の施設は、幼稚園、小学生向けの施設が多く、以前、万代市民会館にありました万代青年の家もな</p>

	<p>くなり、中高生の居場所や、中高生が学校を越えて関わる機会が少ないのが課題だと考えております。そこで、「学校以外の多様な仲間とつながる」「地域と出会う」「自分が広がる」をコンセプトに、中高生の居場所をつくります。大人が考えた居場所ではなく、中高生を対象に実施する居場所ワークショップにて、居場所の名称やルール、やりたい事、必要な設備などを検討し、整備していく予定です。</p> <p>次に、3のプロジェクト型学習の提案についてご説明をしていきます。こちらは、中高生が新潟市の地域課題を解決するプロジェクトを企画し、それを私たち大人がバックアップをしながら、中高生のシビックプライドを醸成していきます。プロジェクト学習については、すでにみらいズ works が今年度初めて実施した、「中高生みらい探求ラボ SPIRAL」をこの施設の自主事業として位置付けていくイメージです。この事業はメディアからも大変注目されましたが、今年度新潟市内の中高生17名が自主的に参加いたしました。来年度も、さらに新潟市を面白くするプロジェクトにチャレンジしたい、友だちにもどんどん声をかけたい、発信したいという中高生の意欲がむくむくと湧き上がっているところです。その次なる展開をつくるという上で、この施設の自主事業として、中高生の居場所と連動しながら発展させていきたいと考えております。人口減少が喫緊の課題となっている新潟市において、中高生が新潟市の魅力的な大人を知り、課題や可能性を感じながら、自分がいつか担い手になるんだという、当事者意識を育む体験を充実させていくことが必要ではないでしょうか。そのためには、地域でのリアルな体験を積み重ねること、魅力的な大人と出会うこと、寄り添っていくメンターがいることが必要条件だと感じております。養成した指導者がメンターとしてここで生きてまいりますし、古町の近くにあるこの施設の立地を、十分活用しながら進めてまいりたいと考えております。</p> <p>最後に、2の市民アートスタジオ事業ですが、施設の情報発信、市民への芸術活動の場の提供、交流活動を促進することを目的とし、施設を市民や団体に積極的に提供していきます。加えて、中学校や高校の美術部や書道部を中心とした、芸術活動をしている中高生団体にも積極的に貸し出し、中高生がアーティストと文化交流できるような仕掛けも検討しております。</p>
<p>申請者</p>	<p>ここまで、青少年体験活動についてご説明させていただきました。</p> <p>ここからは、少し視点を変えまして、管理・運営業務に関しましてご説明いたします。まず、複合施設の特性を生かした取り組みについてご説明いたします。本施設は文化・芸術活動の支援と青少年の体験という、異なる二つの機能を持った施設です。この両施設を有益的に複合して機能させることが、本指定管理業務において最重要課題です。ここにお示した図をご覧ください。横方向には芸術創造村の理念のベクトル、下から上への縦方向に国際青少年センターの理念をベクトルにして示してあります。そのベクトルが交わった黄色の部分にそのヒントがあります。また、この施設は1階が芸術創造村、2階が共同部分、3階・4階が国際青少年センターという構造になっております。そのため、国際青少年センターの利用者は、必ず芸術創造村を通過して国際青少年センターに行く動線になり、文化・芸術に興味のない利用者も文化・芸術に触れることとなります。私たちは、この施設特性を生か</p>

し、1・2階の展示方法を工夫するなどして、見て、触れて、行うオペレーションを実施いたします。具体的な方法としては、アーティストの創作活動と、青少年の体験活動を合体させたイベントを自主事業として実施します。ミューラルアートは、けんとう放送がイベントとして積極的に取り組んでいる事業であり、中高生などへの訴求効果も期待できます。また、体験プログラムとして、アーティストが先生やインストラクターになり、行うプログラムを実施いたします。さらに、今度は子どもたちがインストラクターになり、招聘アーティストに新潟の良さを教える「まちめぐりツアー」は、アーティストの気分転換にもうってつけです。私たちは、他の施設においてもこのような取り組みを行っております。いくとぴあ食花は性質の違う4施設が敷地内にあり、それぞれの回遊性が大きな課題となっております。この上段真ん中の写真をご覧ください。この写真は動物ふれあいセンターのアルパカの散歩を、交流センターの花畑で行っている写真です。かわいい動物ときれいな花畑と一緒に散歩することのできるこの企画が、いくとぴあの人気イベントとなっております。本施設においても、施設の特性と利用者ニーズを分析し、さまざまな交流企画を実施してまいります。

次に、情報発信についてご説明します。当グループのけんとう放送はまさにPRの専門家であり、電波媒体をはじめ、さまざまなコンテンツを持っております。このコンテンツをフル活用して、情報発信をしております。また、みらいズ worksも中高生向けフリーペーパーを発行しており、発行数も年々増加しております。このホームページ画面をご覧ください。開業準備でもご説明いたしました、この画面は本施設向けにけんとう放送がデザインした画面です。選定後は速やかに準備を行い、開業予定や開業イベントの案内など、3月中をめどにプレアップすることが可能です。また、けんとう放送はユースカルチャーにも精通し、行政とともに連携したイベントを企画・実施し、約2,000名を動員した実績があり、本事業においてもその実績とネットワークを遺憾なく発揮して、情報を発信してまいります。

管理経費についてご説明します。管理経費の効率的執行は、指定管理者としての責務です。私たちはコストの見える化に取り組み、この課題と向き合います。ここにお示しましたような、具体的な取り組みを着実にを行い、職員にもコスト削減意識を持った予算執行を徹底してまいります。ここに愛宕商事、新潟ビルサービス、グリーン産業の指定管理実績をお示いたしました。ここでは、本施設の類似施設の実績のみを示しております。また、みらいズ works、けんとう放送も、さまざまな業務において、お示しましたような実績を有しており、各方面から高い評価を頂戴しております。

続いて、組織体制についてご説明します。当グループはここに示した方針を、構成各社が運営責任を共有して事業にあたります。そのために、各法人代表者により運営会議を毎月開催してスピーディーな意思決定を行い、現場責任者が安心して業務にあたる組織体制といたしました。ここにあります組織図にありますとおり、当グループは本業務における業務を具体的に落とし込み、各業務文書を定めて人員配置をしております。開業準備期間において、さらに明確に業務を確認して円滑に開業をいたします。業務に必要な研修は、研修計画を定め実施してまいります。ま

	<p>た、各社は経営戦略の一環として、ワーク・ライフ・バランス推進に取り組んでおります。この方針をさらに推進して、職員満足度を向上させることが顧客満足度の向上につながります。安全確保に関してです。利用者の安全確保は指定管理者としての使命です。当グループの新潟ビルサービスは、県内のビルメンテナンス会社で唯一、機械警備による24時間の集中管理センターを有しており、事故発生時には職員と連携して速やかな対応を行うことが可能です。緊急時マニュアルに関しても、あらゆる事故・災害を想定して、最優先で対応。開業前に、職員全員で訓練・研修を行います。本施設では、定期的な教育や訓練をすることが必要であり、この対応もマニュアルに記載し、安全対策を施します。また、施設賠償責任保険やイベント保険等にも適切に加入し、リスクについても万全に準備を行います。環境保護に関しても、アーティストの作品制作で発生した廃材を利用するなど、利用者にも環境保護意識を伝えます。地域貢献に関しても、われわれグループは積極的に取り組んでおります。また、コンプライアンスに関しても、事務手続きマニュアルを整備して、これまでの業務においても公金取り扱い事故等は発生しておりません。個人情報保護や情報公開に関しても、積極的に取り組んでおり、法令順守には万全を期して業務を行います。この画面の下から2番目の女の子の写真をご覧いただけますでしょうか。この写真は、私どもが管理します菱風荘の自然体験合宿に参加した女の子の写真です。私たちは、この施設でも純粋なこの笑顔が見たい、それが当グループ事業理念の根幹となっております。ここで説明した事業計画を着実に実施し、利用者に「来て良かった」と言っていただけの施設運営を目指して、誠実に事業に取り組んでまいります。</p> <p>以上で、事業計画の説明を終了いたします。ご清聴ありがとうございました。</p>
<p>太下会長</p>	<p>ありがとうございました。</p> <p>次に、委員から申請者へのヒアリングを行います。質問は全委員から質問を述べてもらって、それにまとめてお答えいただくかたちでお願いします。委員の皆さま、質問がありましたらお願いいたします。なお、質問が複数ある場合は何個あるのか、先におっしゃって質問を述べてください。</p>
<p>豊島委員</p>	<p>大小取りまとめて、4つほどお聞きします。まず一つは、今、五つの企業体で今回運営をしていくというお話がございました。運営会議を毎月開かれて、それぞれのタイムリーな協議をしていくということだと思いますが、最終決定はどこで決まるのか。もしくは、非常にスピード感の問題があるのかという疑問が一つあります。</p> <p>それから二つ目には、この資料では年間の利用者数が分かりません。どのぐらいの方、子どもたち、大人をベースとして考えておられるのかというのをお聞きしたい。</p> <p>それからもう一つは、先ほど、人間関係プログラムをリーダーシップ関係でやるとおっしゃいました。今、非常に人間関係が希薄な中で、どんなかたちでやっていくのか。ストーリー的にお聞かせ願えると、ありがたいと思います。</p> <p>最後、クレームの話がございました。クレームについては、開示を行うという記載がないようですが、これを公表するお考えはないのかお聞きしたいと思っています。公表できないか。クレームを公表できるかと。以上。</p>

長澤委員	<p>今のと、ほぼ同じ部分ですけれども、一つだけお聞きしたいのは、先ほど五つの企業体の皆さまが、1本よりは5本の矢というお話がございました。そのとおりと 思う部分もありつつ、ビル管理をメインにやってらっしゃる3社はもともと共同で 事業をなさっていらっしゃったと承りましたけれども、ほかの2社との関連という か、どういう経緯でこのたび、こうやってご一緒になるに至られたか教えていただ ければと思いました。</p>
橋本委員	<p>2点です。前の方と重なるのですが、スケジュールを見て、大変堅実に準備され るのだなと思ったのですが、ソフトのプログラムの計画については記載がないで す。ということは、つまり、今、お話を聞いていると、ともに市と相談したり、ス タッフと相談したりしながら、歩みながらつくるとい、だからここにはないとい うか。今、プログラムは作成中という話もありましたが、事業書を見ても実績と（例） とか一例とかと出ているので、現段階ではこの計画はどこまで具体化しているの かが少し気になりました。そのときに、中高生に焦点を当てた部分があって、これは なかなか新鮮だと思ったのですが、先ほどの話だと、17名。そんなものかなとは思 うわけで、目標の数値で、例えば、中高生を対象にしたプログラム等にはいった いどれぐらい、なかなか難しいと思うんですよね、中高生は。ましてや、例えば、 居場所をつくるみたいにして、中高生がそこに場所があって、これもなかなかいい と思うのですが。そこら辺、呼ぶための魅力的な、ワクワクするようなプログラム がスケジュール的にはないので、どれぐらいの人数を考えて、どんなプランを準備 しているというところの、現段階での具体化、めどについてお話しできればなと思 いました。</p>
綿江委員	<p>3点ございます。2点が体制の話でございまして、1点目が、青少年の部分をか なり厚く提案されていて、非常に具体性を帯びていたのですが、芸術面ではそれに 比べて具体性というか、どのような状況でもこういうことは書けるだろうなとい うことを思ったのですが、体制を拝見させていただいて、新潟県の近代美術館の館長 および芸術系大学卒の学芸員の方と、この二つと一緒にされているのですが、具 体的には芸術面に関して、非常にノウハウがいる部分ですので、どういう体制でこ を厚くされるのかというのが1点目。</p> <p>2点目は端的に、常勤が7名と書かれておりますけれども、基本的に民間の指定 管理者を含めて、こういうものをとると結構疲弊されている現場の方にお会いさ せていただくのですが、ここら辺の雇用環境は有期、無期も含めて、具体的に想定さ れているところをお伺いしたいのと、3点目がちょっとトリッキーな質問なので すが、仕様書を行政が、新潟市さんが示されて今回ご提案されたと思うのですが、こ の仕様書の中で、非常に皆さんがやりたい事の中で、足枷（あしかせ）になって いるというか、いろんなポイントであると思います。特に、ボトルネックになって、 こういう部分も今後変えられたらいいなと想定されているところというのはあり ますでしょうか。この3点をお願いしたいと思います。以上です。</p>
渡邊委員	<p>たぶん、みらいズ works さんが構成メンバーなので、やっぱり子どもの視点、 中高生の視点というところが、大きく今回の提案の中でお示しいただいたのだと思 うのですが、それはすごく大事なことだとは思ってはいます。斜めの関係で子ども</p>

	<p>たちを支援していく、支える仕組みは非常に重要だと思うのですが、地域的な背景からいくと、高齢者が多い地域でもあろうかと思えますし、高齢者や障がい者に対する取り組みというところはどうかかなというところ。</p> <p>それから、やはり大畑少年センターが閉鎖になるというところなので、その辺りの子ども、そういうもう少し小さい子どもたちに対する対応をどのように、幾つかというのがあるのかなというところでは。</p> <p>あと、ほかでも出ましたけれども、5社連携というところで、本当に何か起きたときに責任体制とかそういうところが、やはり子どもたちのことを考えたりすると、非常に大きな問題になってくるケースもあろうかと思えますので、その辺りの皆さんが同じように思っているような事。</p> <p>それと、本当にみんなおっしゃいましたけれども、芸術というところ。ここはとっても難しいと思うんです。複合型で、あれもこれもそれも入れなさいという仕様書かと思えますので、その辺りをどこにフォーカスしていくのかという、今後の芸術、先ほどもおっしゃいましたけれども、に対する検討、方向性をお示しいただけるとありがたいです。</p>
<p>太下会長</p>	<p>では、私からも1点。だぶりの部分もあるので、まとめてお答えいただければ結構なのですが、このアーティスト・イン・レジデンス事業は仕様にもあって、それに応答されているわけですが、アーティスト・イン・レジデンスという事業をきちんとやっていこうとすると、これは、基本は双方向の関係なんですよ、ご存じのとおり。要するに、海外なり国内のアーティストにレジデンスをして、協定を結んで、双方向にアーティストを送り合うというのが基本になります。ですので、そういうネットワークを有している人物、ないしはネットワークを構築できる人物がキーパーソンとして入らなくてはいけない、というのが基本になってくるであろうと思います。こういった点に関しての準備状況をお知らせください。以上です。</p>
<p>橋本委員</p>	<p>雇用のことで、開業を順調に行うため、現在雇用中の職員を中心に配置しますという。これで、つまり、今働いている方がまわってくる。例えば、こども創造館のセンターの館長さんは変わるんですか。そういう、中心に配置しますということは、引っっこ抜かれて新しいここに来ることなのか、兼務なのか。そこら辺が、この意味が、中心に配置しますと。じゃあ、前の人たちは穴になるのかなという。そこは、人材豊富なでかいグループですので心配ないのかもしれませんが、トップの方は変わるのでしょうか</p>
<p>太下会長</p>	<p>移ってこられる方が常勤なのかどうか、お答えいただければと思います。</p> <p>質問は以上でよろしいですか。そうしましたら、順不同で、別に一問一答じゃなくて結構ですので。ダブりの質問もありましたし、お答えいただければと思います。</p>
<p>申請者</p>	<p>私から、共同事業体という、皆さんはすごく不安に思っているかもしれませんが、私どもはもう10年ぐらいいになりますか、グリーン産業さん、ビルサービスさんと共同でやっているというところで、お金等々の一つのやりかたって、それぞれ、グリーン産業さんはビルの、グリーン産業ですから緑の管理、芝とか、お庭の管理とか、施設の中のそういうものをやっております。ビルサービスさんはビルのメンテナンス等々を、全部責任を持ってやっております。私どもは企画・運営というところ</p>

	<p>ろでやっている中で、3社が社長連中、事業部長連中、その辺が報告・連絡・相談等々、当然、指定管理事業というのはご承知のとおり、そんなに儲かるものではないです。私ども3社で、赤字を作ったとかという時も3社案分で、本当に3社が信頼し合ってやっておりますので、私どもも本当に信頼しているし、遅くなるということは全然ありません。例えば、今日これがしたいと、当然、報告・連絡・相談、その中で皆さん責任のある、ある程度まではここで片付けられますよ、ただ、これは館長だけではちょっと重いよねみたいな案件がやっぱりあったとしますと、例えば、翌日には皆さん会えば、そこでそれぞれの事業、私であれば社長、専務が来て、そこで話し合いです。それで、「実施」とかそんなのが決まりますので、最終的には3社が共同で責任を取っていると。その辺は、きちりと責任を取って、申し訳ないのですが、やっぱり民間だからこれってできるよね、かなり早い決定時期で、時間でスムーズには今いっていると思っております。例えば、3社でやっている新潟ふるさと村とかアグリパークしかり、菱風荘は3社ではないですが、動物ふれあいセンター、いくとぴあ食花等々、立ち上げから3社が、社員同士も信頼関係でやっておりますので、その辺は、共同事業体イコールちょっと不安だ、ということはあるかもしれませんが、私どもの共同事業体においてはそういう懸念はないと、私は確信しております。</p>
<p>申請者</p>	<p>共同事業体の逆にプラス面、マイナス面があると思えますけれども、実は全国の事例でも今、指定管理業務を途中で放棄するという会社も出てきておるように聞いております。私どもの場合、仮に代表法人である愛宕商事に何かあった場合にも、グリーン産業、ビルサービスはそれを十分補完するだけの会社でございますし、安定して運営していけるということで、利用者に決してご迷惑をかけない体制もできていると感じていただければと思います。</p> <p>それと、先ほども少し雪のときのお話をしましたように、先週が雪のときも、私どもだけで数施設がございますけれども、業務を分担しながら除雪を行っていたら、とても間に合いません。グリーン産業さんが朝から自分たちの機械を持ち出して、アタッチメントをつけて除雪をして、それにビルサービス、私どものスタッフが数十名かかって全部の施設を午後には開けられました。こういうリスクマネジメントという部分は、共同事業体にはプラスだったのです。ただ、皆さんがご心配されるように、決定力が遅いという件に関しては、私の説明が足りなくて申し訳ございません。先ほど高橋が申し上げましたとおり、代表者会議において、ほとんどの権限は現場責任者、館長に委譲いたします。そこで起こったこと責任は、最終的に代表、管理会社を含め、構成企業で負担をするというかたちにしておりますので、例えば、開業準備をしていったら、「こんな予定外の物を買わなければならない」「どうしましょう」「100万かかります」。これは普通の会社であっても同じだと思います。1社であっても、上に上がって行って稟議書を切って、同じことだと私は思うので、それを3社であれば30万ずつの負担で買えますよねということもありますし、逆にプラスの面もあると。ただ、意思決定は、これだけは申し上げますが、今までほかの施設で、私どもの意思決定が遅くて指定管理業務が滞ったことはございません。全て3社でやってきて、全てスピーディーに行っております。行政さん</p>

	<p>も3社だから任せられると言っている施設もございますので、3社だから、遅いから、ご指摘も十分分かりますので、本施設においては代表者会議等ができるだけタイムリーに行いながら、事業を進めていきたいと思っております。</p>
申請者	<p>現在、こども創造センターの館長として務めさせていただいて、最終決定の、先ほどお話が、運営会議というのがどういう位置付けかというご質問だったと思うのですが、現在やっていて、最終決定とか、本当にきちんと決定していかなければいけないことは、市で定められた条例であり、市民に対する責任があるとは思いますが、実際にそういう問題が起きつつあるときには、本社の代表の皆さんに、すぐ問題を今は上げております。上げると即、それに対する返答が返ってきて、私どもの場合にはこども未来課と協議をしながら解決するというかたちで、運営者会議が全て決定して下してくるというシステムではありませんので、ご理解いただきたいと思えます。</p>
申請者	<p>各現場、現場から上がってくる。私たちが「こうなさい」なんていうことは一つもございません。</p>
申請者	<p>先ほど、プログラムの準備状況について先生がおっしゃったように、「一例」と書かれておりますが、先ほど、私がお説明しましたように、この一例に示したプログラム案については、全て私どもは指導案から落とし込んで作っております。ですから、この一例が、プログラムとしてスタートすることも可能でございますので、ただ、備品についてまだよく分からない部分があるので、例えば、このプログラムをするにあたって必要な備品があるかないか。備品については行政さまがご用意して、私どもにご提供いただくわけですので、その辺りもあって、一応、私どもならこれをするということで、細案を落とし込んだ上でつくった教育プログラムでございますので、これについては準備が遅れているということはありません。</p> <p>それから、今回、みらいズ works さんにご参加いただいた経緯でございますが、実は今回、私どもこの施設、特に大畑少年センターが移管してくる施設だということで、芸術の部分はちょっと横に置いておいたのですが、教育部分についても相当の仕事だと認識しております。そのときに、われわれもアグリパークにおきまして、教育委員会さまと共同してアグリ・スタディ・プログラムという、教育指導要領に則ったプログラムをつくって、一緒に運営させていただいております。その過程の延長線の中で、実は、NPO法人みらいズ works さんに業務を関連されている新潟大学の川端先生が、私どもに「こういう団体があるけれども、皆さんのお力になるけれども、どうだい？」というお話を頂戴して、今回、小見代表のところに加わっていただいたという経緯でございます。</p> <p>けんとう放送に関して、この中でも申し上げましたように、先生からもご指摘があったように、芸術部門というのは非常に難しく、われわれもどう切り口をしたらいいのだろうという部分があった中で、少し純然たる芸術とは違うかもしれませんが、けんとう放送はサブカルチャーにも非常に精通していたり、若者文化にも精通しているということもあって、われわれと違う切り口があるということで、逸見社長にお話しして事業に加わっていただいたという経緯でございます。もちろん、広報・PRの件は全てお任せして進めていくと。それが先ほどとかぶるかもしれませ</p>

	<p>んが、5法人で開業準備なり運営を進めていくとなると、それぞれが責任を持って同時にスタートしていけるんですね。1法人ですと、この部署、この部署、この部署ではありません。おそらく、指定管理事業部というのがあってそこがやることになりますので、限られた人員になってしまいますが、例えば、今回のわれわれの場合であれば、PR部門はけんとさんに丸投げして準備していただくことができます。それから、プログラムについては小見さんのところをお願いして、準備していただいて合体することもできるということで、共同事業体の場合は逆にスピード感があるという部分もあるのかなという気はいたします。</p> <p>それと、クレームの開示については、当然させていただきます。今、現状でも、私どもの指定管理のところではホームページ、あるいは館内の表示においても、全ていただきましたこんなご苦情がありましたと、それに対してどうしたというレスポンスは返しております。これは、説明しなくて申し訳なかったのですが当然してまいります。</p>
申請者	<p>私たちが計画していく段階で、実はプログラムというのは基本的に三つあるんですね。先ほど説明したように、団体の皆さんが体験していくようなプログラムは、実は学校等は大体もう前年度の2月、3月辺りに計画を始めていきますので、この団体で体験をしていくプログラムについては、もうほとんど準備が整っている状態です。それから、先ほどお話ししたような、個人向けのプログラムの展開というところについては、今度は地域の方たちが指導者になっていただくとかという準備等がこれからありますので、ここを今、目安をつけながら、大体こういう地域の方は、ほとんどが大畑少年センターで活躍していた方たちを、上手に継続していただくというケースで持っていきたいとは思っているのですが、そこにそういうかたちで今、準備を整えていかなければいけない。まだ、交渉というのは当然できませんので、そのところはまだやっていない状態です。それから、人間関係プログラムに関しては、まったく新しい取り組みでありますので、全て、ほとんど計画が今、練られていて、先ほど説明があったようにいつでもGOサインできていくという状態になっております。大きく分けて、そういうプログラムが三つありますので、準備状況が若干違っているところがあるのですが、ご承知おきいただきたいと思います。</p>
申請者	<p>先ほど、雇用の関係で私どものお示ししました5名に関しましては、すでに内済みでございますので、こちらの職員が決まれば、即、こちらで常駐して業務を行う。しかも、具体的にどの仕事をやってもらうかをもう決めております。先生がご提言のとおり、当然、他の施設でその分穴が開きますが、当然、その上席者が補完する人間が育ってきております。指定管理業務を私どもは10年しており、下の人間も育ってきておりますので、その辺も配置した上で、今回の応募に踏み切らせていただいたと考えていただければいいと思います。</p> <p>それから、先生がお話しされましたように、困っている事、まさに、綿江委員と委員長との質問部分でもありますが、AIRです。アーティスト・イン・レジデンス、芸術業務に関しては、正直に申し上げまして、私どもには未知の部分です。これから、全力を挙げて取り組んでいく中で、徳永前館長には人脈をフルに駆使していた</p>

	<p>だきながら、芸術家の皆さん、あるいは団体、協会さまというところにお声をかけながら、ご協力していただいたり、特に千代田にあります施設とか、日本国内にAIRの施設がたくさんございまして、受契した後、すぐにピックアップしてお訪ねしながら、連携関係をしたり、情報共有したりすると同時に、当社はNSGグループでございますので、デザイン専門学校等の先生方の人脈等も使わせていただいてまいりたいと思っております。ただ、本音を申し上げて、正直、AIR、芸術部門に関しましては一緒に組み立てていくように、全力を挙げて取り組んでいく事業と捉えておりますし、教育事業に関しては明日からでもスタートできる自信はございます。</p>
申請者	<p>まず、リーダーシッププログラムの、どんなかたちでやるのか、ストーリー的に説明してほしいということだったのですが、対象としましては各学校の生徒会ですとか、児童会とかのリーダー層の子どもたちが対象なのですが、これからは100年生きる時代と言われてはいますが、従来のリーダーシップ観だけでは、今の子どもたちはこれからの社会を、組織を生き抜いていけないのではないかという前提に立っております。その上で、これから社会がどうなっていくと予想するか、そしてその中で、組織だったり、個々人の生き方、働き方がどう変わっていくのだろうかというのを、きちんと子どもたちにも向き合ってもらいたいと思っております。その中で、自分自身は一人の人間として、そして将来働いていく人間として、どうあるべきなのかというところを考えていきます。文部科学省も言っていますけれども、主体性・多様性・協働性が育まれるプログラムを組んでいくのですが、課題ですとかどうしても一人では乗り越えられないような難しい問題を、自分たちでクリアしていきながら、そういう力も育むというようなことを考えております。</p> <p>あと、加えて、中高生17名ということだったのですが、実は、今年度はみらいズ works 主催ということで、実はそんなに広報に力を入れず、定員も20名を予定しておりました。それで17名ということでございます。具体的には、魅力的なワクワクするプログラムということなのですが、私たちも東京や長野にも視察に伺っております。できる限り、中高生目線で面白い企画を考えたいと思っております。ここで指導者養成講座で参加してくれた大学生が高校生に向かって、紙芝居を使って語り掛けるようなものですとか、他県でも哲学カフェですとか、英語とかの学習支援なども充実させていきながら、近隣の学校町にある学校の高校生ですとか、あとは柳都中学校とか寄居中学校とか、近くの子どもたちが帰り道に立ち寄れるような、個々で学習するだけではなくて、自分の世界が広がるようなそんな可能性のあるプログラムを提供したいと思っております。以上です。</p>
太下会長	<p>あと2、3分ですから、まだお答えいただけていない年間の利用者数と、それから高齢者・障がい者・未就学児への取り組みについて簡潔にお答えください。</p>
申請者	<p>年間の利用者数については、現在、大畑青少年センターは約5万人という利用者でございますが、この中にはご存じのとおり、夕方からの子ども預かりの数字が、正直、開示されておりませんでしたので、私どもとすれば目標数値を挙げられなかったということでございますが、おおむね、現大畑青少年センターの5万人規模の集客については、目安として考えております。</p>

	<p>それから、高齢者等へのアプローチに関しても、私どもは田舟の里等で入浴施設も経験しておりますので、私どもが最初にするのは、地域へのごあいさつ、二葉中学校の近隣の皆さまにご迷惑をかけないように、ご理解をいただくアプローチをしていく中で、そういった方々の部分も伝えていきたいと思っております。</p> <p>あと、目標数値については、先ほど言いました大畑の部分が5万人、プラス芸術部門を合わせまして、今、新潟市が示されています 58,000 人という数字は確実にクリアしたいと思っております。</p> <p>それと、AIRの事業等に関しても、私どもはできる限りの人脈を使ってやっていきたいと思っておりますが、正直に申し上げまして、これには経費の問題もございます。新潟市が今回予定しております、文化政策課さまからいただきますAIRに関します費用について、440万から450万というところになっております。その費用の中で、どこまで呼べるか。その辺もございますので、われわれとしては最大限ご理解をいただいて、意欲のある芸術家の皆さまにお声掛けして来ていただいたり、それから情報発信に関しては、委員長からご不安もございましたけれども、できる限りSNS等を使って、相互に発信ができる体制を取りたいと思っております。</p>
綿江委員	<p>1点だけ、端的に。先ほどの長期かどうかということ聞いたわけではなくて、労働改正法に対する対応ということで、その雇用の部分が無期化するのか有期化するのか。無期化した場合にどうかというのを時間の限り。</p>
申請者	<p>現在、配置する予定の職員は全て正社員でございます。無期です。</p>
綿江委員	<p>無期で。</p>
申請者	<p>はい。当然、この春から、私どもが指定管理をやって5年以上たっておりますので、当然、労働基準法の改正で5年ルールが適用されますので、全て専任へと切り替えていく、配置する予定です。</p> <p>ほかにも、2年、3年で、優秀な人間は正社員に登用してやっております。</p>
渡邊委員	<p>人間関係プログラムは新しい取り組みだといって、今回、例えば指定管理に選定されなくても、このプログラムはみらいズ works さんとしては、世の中にお示していく予定ですか。</p>
申請者	<p>はい。</p>
太下会長	<p>これでヒアリングを終了したいと思います。ありがとうございました。これで、「にいがたみらいズプロジェクト」のプレゼンテーションおよびヒアリングを終了いたします。なお、評価結果につきましては、後日事務局よりご連絡いたします。申請者の皆さまはご退席をお願いいたします。</p>